

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### 羊毛の文化史

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1977-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/623">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/623</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 羊毛の文化史

山根章弘

## 「羊毛の文化史」研究の動機

文化とは人間が住みよい美しい生活を生み出そうと努めつづけて作り上げてきたものである。

従来研究されてきた文化史は、文学や美術の文化だけに片寄っていて、一般の人々の生活や生活の中の文化財（生活文化財）の美と流れをほとんど語っていない。そのような、今まで誰れも手がけなかった課題——例えば、生活の中から生まれて美しい形として伝えられている生活文化財の資料を蒐集し、それを美学と文化史の立場から整理してその研究成果を私はいくつかの著作にまとめて来たのであるが、日常生活の身の廻りにある一番身近かな「羊毛の生活文化」に目を向けて見て、これらの資料や記述を調べようとしたのだが、驚いたことには、資料はもちろんのこと、その歴史さえ綴られていないことを発見した。ロンドンに本部を置く国際羊毛事務局の熱心な協力を得たが、それでも、文化的な資料や記述に関しては全く絶望的だった。

それでも、いや、それだからこそ尚更、私は、学問の世界で今まで誰

れひとり手がけていない「羊毛の文化史」に取り組んで、乏しいながらも、資料を直かに自分の目で確かめながら、羊や羊毛の文化の流れを明確に辿って見ようと思ひ立った。昭和四十六年のことである。

\*

濠州産の羊毛の約六割を輸入する世界一の羊毛再生産国になった日本という国であるのに、羊や羊毛に関する一般人の知識はゼロにひとしい。——しかし、それも無理もないことだと思ふ。何故なら、古来、日本人は代表的な「農耕民族」であったからである。また、明治になるまで、「羊」という動物を、歴史上の数人を除いては、誰れも全く目にしなかつたからでもある。

\*

幸い、幼少のころから英国ロンドンで育ち、羊を中心とした「牧畜文化」の風土の中で生活し教育を受けてきた私は、羊の美しさや善さを身にしみて知ることが出来たし、さらに昭和二十三年から何年間か、キリスト教神学大学で神学や人間文化史を講じていたときに、牧羊の天空から唯一の一神を信ずる一神教が発生したことにも気がついたのである。

足を棒にして探しまわってみても、羊毛文化に関する正確な資料はほとんど見つからなかった。いい加減な記述の、こども向け図書が一冊か二冊ある程度で、それも又淋しかった。

幸い、国際羊毛事務局の激励と支えとがあって、昭和四十七年から、この「羊毛の文化史」の研究と執筆はつづけられた。まだあと数年間はこの研究に取り組んで行くつもりである。

浅学の身をかえり見ずに、ひとり取り組むこの小稿には、誤謬や独断が多いかも知れない。諸賢の御教えや示唆を数多く賜りたいと、心からお願いする。

## 序説・羊の文化について

### 一、羊と日常生活感覚との関連

英語で羊毛のことを wool (ウール) という。——しかし、逆に「wool イコール羊の毛だけ」とは限らない。wool (ウール) という英語の中には、他の数種の動物たちの毛も含まれている。

人間の日常生活に使われるために剪りとられる他の動物たちの「毛」は、本来「羊」の毛だけを意味した wool (ウール) ということばの中に包みこまれてしまっていたのである。それは、「羊」が人間生活の中で占める位置があまりにも強かったからである。

\*

羊が人間生活、ことに西欧人の生活の中に占める文化史的意義は大きい。中世以降の西欧人の生活は、キリスト教を基盤として存続している。救世主キリストは、全人類の罪の「あがない」のために十字架の上で屠られた全智全能の神の「羔(こひつじ)」と言われる。——旧約時代ヤハヴェ(日本聖書協会訳の聖書ではエホバ)の神への祭祀は、小羊を犠(いけにえ)にする習俗の神学的な解釈である。神に犠(いけにえ)として供えられたキリストは、同時に、羊の群れを守る牧羊者にも喩えられる。牧羊者を意味する英語「shepherd」(シェパード)は、迷える小羊「a stray sheep」(信者のこと)を採し導き救い出す「牧師」をも意味する。

\*

羊飼いの少年ダビデは、羊を牧していた知恵を頼みに、イスラエル全軍を震えあがらせていたペリシテ軍の巨人ゴリアテに、単身素手で立ち向い、牧羊者常用の石投げ器だけで彼を打ち倒して、イスラエル民族の危機を救った。——その巨人に立ち向う瞬間の雄姿を、ミケランジェロ・ブオナッロッチェは、巨大な大理石塊の中から彫像「ダビデ」として見事に彫り上げ、それをフィレンツェの街の中央広場に据えた。——そのフィレンツェの町が、実は、十五世紀になって羊毛の織物を一手に引き受けはじめて、ヨーロッパの中で最高の経済的活気と社会的繁栄を示した中心の都市なのであり、この羊毛の織物がイタリア・ルネッサンスの気運を起こした、と西欧の歴史学者は一樣に説いていることは、諸賢衆知のことである。

そして、このルネッサンスを隆盛ならしめた原動力は、羊毛を集め、これを織物に加工し、これを他国に貿易することによって富を増大した一部の市民たちであった、といわれる。——その富は、間もなく「資本」という言葉に置き換えられ、近世の資本主義の基礎を作ったのであるが、その「資本」に当る英語の 'capital' (キャピタル) は、ラテン語では 'capitale' であり、この「カピターレ」は羊などの家畜のの頭を意味する 'caput' が語源である。だから、「資本」を意味する言葉は、実は、族長の財産である「羊の頭」数を指したものであった。羊の頭数が、その所有者の資産の量をはかる基準だったからである。——羊毛の織物が栄えた「資本 (キャピタル)」が「羊の頭」と同義語だったことは、不思議な「つながり」である。

羊と人間とのかかわり合いを除外して、羊毛の文化は語ることが出来ないし、もっと厳密に言えば、西欧の文化の機微にさえも触れることは出来まい。

\*

その西欧に対して、東洋の中でも殊に日本という国は、地球上の代表的四大家畜 (牛馬豚羊) の一つであった「羊」という存在や観念に関しては、世界で最も「かかわり合いの少ない」国土の一つであったようである。

たしかに、文献には、

「秋九月、百濟、駱駝一疋、驢 (うさぎうま) 一疋、羊二頭、白雉一隻を貢る」 (日本書紀、推古天皇七年) — (A.D. 599年)

「五月、新羅人李長行ら、羖羆 (これき) 羊二、白羊四、山羊一、鷲二を進む」 (日本書紀、嵯峨天皇弘仁十一年) — (A.D. 820年)

「承平五年九月、大唐吳越州の人、蔣丞勲が羊を献じた」 (日本紀略) 「承安元年七月、入道相国、羊五頭、麝一頭を院に進む」 (百練抄) などとあって、羊だか山羊だかわからない珍獣が異国から舶来され献上されたようだが、それは一般の庶民には全く目にも耳にも触れることのない存在であった。

\*

以来、有蹄類の家畜 Ovis aries 「羊」に関する記録や記述は、江戸末期までは全く見当たらない。絵画や彫刻に残されたものも、ほとんど見たことがない。

日本人にとって「羊」という動物の実体は縁のないものであった。——であるから、勿論、羊毛とも羊毛文化とも、そしてまた牧畜文化ともすべて全く無縁の風土であり無縁のお国柄であった。

しかし、この日本文化の中で「ひつじ」文化が受け入れられる素地が一つだけあった。——それは、十千十二支の一つとして挙げられる「未」という字と観念である。元来は、古く中国から渡来した十千十二支の区分観念なのであるが、日本では、それらすべてをウノミにして、不思議なことに、この「未」という字を、どういう訳か判らないが「ひつじ」と訓んで、それを何百年間も使いつづけて来た。

他の十二支の動物に対して、この「ひつじ」という言葉だけは「形象のない」観念——それと言われても絵柄が浮び上がって来ない観念——

として拡がって行って、とうとう現在に到っている。上っ面の、口先きだけのコトバであった。

十二支のうち、鼠、牛、虎、兎、蛇、馬、猿、鶏、犬、猪、という十種の動物たちは、日本人が日常生活の中で絶えず耳目に接することの出来た「なじみ」のある動物たちであり、文学的記述や絵画図式の表現も少くないものであったし、また、空想動物の「竜」さえも、民話や伝説や絵画や彫刻などに数多く見られて、日本人にとって「竜」という存在は、疎外感を覚えさせなかった。

これらの動物に対して、最後に残る「未」(ひつじ)という觀念だけは、一体どんな動物なのか、百科事典か中国文学の記述に頼る以外に、明確どころか、おぼろげにさえも浮び上らせることが出来なかった。——ただ、山羊(やぎ)という家畜がたやすく身の廻りに見聞できたから、この山羊の中で角のないもの、この山羊をおとなしくしたものが多分「ひつじ」という動物なのだろう、と思いつくのが精一杯のことだったように思われる。

日本の美術の流れをどんなに辿り探し廻って見ても、私は「羊」の図というものを見かけたことがない。——もし何か一つでもあったとしたら、是非教えていただきたい。

\*

江戸中期、正徳三年(1713年)刊行の日本最初の図入り大百科事典『和漢三才図会』全一〇五巻の中には、もちろん、中国(明国)の「三才図会」に範をとって、天・人・地の広い分野を網羅分類しただけあつ

て、巻三十七の「畜類」の中に「羊(ひつじ)」の項目と解説が載っているが、その解説は中国の記述のままの引き写しであり、それに附けられている図解は、鹿に似た体軀に山羊ひげを生やして曲げた角をつけただけの「山羊」とそっくりの絵柄でしかない。——絵柄だけを見て、これが「ひつじ」だとは到底理解できない。あくまで、ここでは空想の動物存在であった。極めて写實的に忠実に対象を明確に図示することができた「和漢三才図会」の筆者でさえも、実見できないものには手の施しようがなかったのであろう。

紀元前のはるか昔に、名もない人たちの描いた素朴な羊の図(例えば、サザン朝の銀皿の文様、シリアのモザイク床飾り、西アジア、アケメネス朝の銀飾板、等々)のほうに、ずっと明確に、山羊とはちがう「やさしい羊」の姿を単的に浮き彫りにしているのだ。羊の原産地に近いと思われる西アジアの人たちにとって、「ひつじ」は身近かにいた動物だったからである。

\*

発刊部数も極めて少なく、大層高価な上に、数少ない上級知識人しか読むことのできなかつた全文漢文の「和漢三才図会」は、一般の人々にとっては無縁のものであったが、幸いに、江戸中期に入ると、印刷術が急激に発達して、一般庶民でも手にすることの出来る、安価で仮名交り文の読み易い啓蒙書が次々に広く普及して行ったのだが、そんな数多い書物の中からも「ひつじ(羊)」の記述を探し出すのは困難である。

それでも、わずかに、たとえば『三世相大雑書』という庶民のための

大百科全書の中（例えば天保版のものなど）には、中国の絵をそのまま引き写しの十二支の図の中に、山羊に似た絵が小さく一つ見られる。

「羊(ひつじ)」は日本人には無縁のものであった。——それでいながら、未年(ひつじどし)、未の方角、未刻(午後二時ごろから四時ごろ迄)などと日常言いつづけていて、「ひつじ」という語感だけは、「羊」という動物実体から遊離して、日本人の日常生活の心の中に浸みついていたのである。

それだからこそ、日本人には「羊」の実体や羊毛文化を受け入れる「ころ」(情緒)の準備はなされていた筈であった。——それなのに、江戸末期から明治時代にかけて、折角の羊毛の毛織物が輸入されて一般人もこれを着用するようになったのに、それが「羊」の毛から出来ている、という紹介や解説を抜かして、ただ単に「セル」とか「サージ」としてしか呼称しなかったために、ついに「羊」や「羊毛」の観念は置き去りにされてしまった。

明治初期、先ず巡査や軍人の制服として「サージ」の布地が採用され、つづいて、初夏の女性の装いとして「セル」のきものが季節感あふれる快適な衣として普及するようになったのに、この日本という国土にはサージやセルという実物だけが入ってきて、どちらも実は「羊毛」から出来ているものである、という感覚的理解さえもなされていなかった。——ましてや、その羊毛は、愛らしく、温和で、ふかふかしている「羊」という動物から生まれたものだ、というような親近感や直観的理解などは、全く存在しなかった。——日本という国土は羊という動物が身近か

にいない風土だったからである。

明治時代を通して、セルやサージなどの衣料の記事や広告を、当時の新聞や雑誌や文学の中から一つでも見つからないものと懸命に探しつづけたが、羊とか羊毛とかいう文字や記述はほとんど見当らなかった。たとえば「羅紗」という言葉を取り上げて見る。「羅紗」は、ポルトガル語の 'laxa' (ラクサ) が語源だ、といわれているが、羅紗という漢字には、上等の薄織物(羅)、うすもの(紗)という語義しかなくて、この文字が wool (ウール) と結びつく接点がない。

羅紗(らしや)にあたる英語は、'wool' または 'woollen cloth' であって、この毛織物を日常着用している西欧人は、これが wool (ウール) から出来ているもの、その wool (ウール) はいつでも庭先などで見られる、あのやさしい「羊」の毛なのだ、と毎日、身にしみて実感できたのである。

だから、幼児でさえも、羊を見ると、それが自分たちの衣料と関わりがある、と判断できた。英国に古くから伝わる童謡集を集めた絵本のことを "Mother Goose" (マザー・グース) といって、一番最初に刊行された本は十八世紀初期ごろのようで、その後、何十種という絵本が、現在に至るまでに大変な部数として英米の各家庭に浸透しているが、この『マザーグース』"Mothers Goose" の中で、昔から載っている童謡に "Baa, Baa, black sheep" (バババ、ブラック・シープ) というのがある。

Baa, baa, black sheep,

have you any wool?

Yes, sir, yes sir,

three bags full:

One for my master,

one for my dame,

And one for the little boy

that lives in our lane. ¶

「一、二、三、羊毛があるね？」

「はい、はい、もちろん」

袋に三つもございます

御主人さまに 一ふくろ

奥さまの為に 一ふくろ

小径でひとりで遊んでいる

元氣な坊やに ハイ！ 一ふくろ。

(山根章弘訳)

庭先きの黒い羊に幼児はたのしく話しかける。羊も気さくに幼児にこたえる。飼ってもらい、愛してもらったお礼に、羊は、飼い主の家族によろこんで自分の「羊毛」を差し出すのである。

西欧で「羊」は、日常生活の衣料と密着していた観念であった。「羊毛の毛織物」(wool)を着ていることは「羊毛」(wool)を身につけてい

ることであった。だから、英語では、羊毛の毛織物のことも、羊毛と同じく「wool」と呼ぶ。「羊」を身にまとっている、という生活の実感が幼少時より浸み込んでいるのである

ところが、文化民族の中で、木綿と絹の国日本の人たちだけが、この「羊毛」と縁のない風土に置かれていた。南方熱帯諸民族と同じような農耕文化的風土は、牧草、牧場、高原山岳地帯の牧畜文化の風土とは断絶していた。——牧畜文化を基盤とするキリスト教文化が、日本では仲々消化できなかったわけである。

## 二、羊飼養の起源

「羊(ひつじ)」が人間に家畜として飼われるようになったのは、人間が狩猟生活を営むようになってから後のことである、というのが、現在の考古学で大体一致した見解のようである。そして、人類最古の家畜は牛であり、次いで馬が登場し、その後に、山羊と羊があらわれる。農耕文化が牧畜文化に先行する、というのが定説であった。

しかし、一九四九年、カールトン・クーン氏はイラン発掘の際、まだ農耕を営まない洞窟遺跡から、家畜化された山羊及び羊の骨を発見したと報告している。——農耕文化以前にすでに山羊と羊がいたとすると、従来の考古学の定説は覆えされることになるわけだが、この報告に関しては、現在のところ考古学上の解釈はまだ一致を見ていないようであ

る。

\*

イランのシアルク、イラクのジャルモ、ハッスナ、エジプトのファイユーム及びメリムデなど（ナイル下流からシリアを経てティグリス、ユーフラティスの中流を横ぎってイラン高原にのびる、いわゆる「肥沃な三日月形地帯」）のオリエントで点々と発見された世界最古の定住農村遺跡では、いずれも、小麦、大麦などの栽培と並んで、羊または山羊が家畜化されていたことが考古学的に確認された。——紀元前五〇〇〇年、あるいはそれ以上の昔のことである。

人間の生活にとって極めて有益であり、その上温和な性質で飼育しやすい家畜だったために、この山羊と羊は、西アジアや中央アジアの山地地帯の農民に広く飼育されるようになり、紀元前四〇〇〇年ごろには、エジプトにも飼育されるようになって、紀元前三〇〇〇年ごろにはヨーロッパにも広がった。

そのころの羊は、現存の、学名 *Ovis aries* 「ヒツジ」の昔の祖先と見られる *Ovis Vignei* という種の羊で、現在でもパキスタンからチベットにいたる山地に野生で見られるものである。——そして、紀元前二世紀ごろから、尾の太い新種のヒツジがこれに取って代わったのである。

とにかく、ユーラシア大陸の南の縁の定住農耕民の文化から、紀元前三〇〇〇年ごろ、羊の牧畜というものが生れ出たのである。

（以上の考古学的考察は石田英一郎氏の学説に拠った）。

そのユーラシア大陸の南、西アジアの西端に位置したイスラエルとい

う高原地帯にも、やはり「羊」が家畜の主なるものとして飼われていたことが、旧約聖書によっても裏付けられる。

旧約聖書は、イスラエル民族の信仰の書であると同時に、民族の歴史の書であり、その記述は、長年月にわたる聖書学や考古学の研究の結果ノアの大洪水以降の記述は、大半、歴史的事実と一致する、と考証されている。

旧約聖書巻頭の『創世記』Genesis は、天地創造にはじまり、人間の始祖アダムとエヴァの誕生から、エデンの楽園を開放された人間の地上の生活のはじまりを物語っているが、アダムとエヴァが、はじめて「男」と「女」としてお互いの「異性」を知って、やがて産み落としたカインとアベルという二人の男の子が、実は、人間生活初期の農耕と牧畜の二つの文化の併存を表象して興味深い。

「創世記」第四章二節から四節までを見よう。

「アベルは羊を牧ふ者 (a keeper of sheep) カインは土を耕す者 (a tiller of the ground) なりき。日を経て後、カイン、土より出る果を持ち来りてエホバに供物となせり。アベルもまた、其の羊の初生(ういご)と其の肥えたるものを携へ来りり。

エホバ、アベルと其の供物を顧みたまひしかども、カインと其の供物をばかへりみたまはざりしかば、カイン甚だ怒り、且つ其の面をふせたり」(日本聖書協会の文語訳本による)。



弟アベルが捧げた羊を、エホバの神が「よし」として受け入れられたということは、乾燥地帯に住むイスラエルの民（民族学的にはヘブライ人）にとって、その生活の基盤は、貧しく苦しい農耕よりも、牧羊の方が適していたために、民族の総意（社会学的に言えば、これはしばしば「神」として表現される）が「牧羊」の方を選んだことを物語る。——貧しく険しい風土にあっては、農耕と牧羊の両立は難しかったからである。

\*

イスラエル民族の歴史が始まる時、ヤーヴェ（日本語訳聖書では「エホバ」）の神は、「羊」を「よし」とされた。——羊は「善き」ものであり、又「美き」ものであったからである。

人類最初の文字の誕生も、このイスラエルの地に接するメソポタミア地方の南部だった——その文字は、物の形を象<sup>かたど</sup>って作った象形文字であるが、米とか目とかの日常身のまわりのものを絵にした甲骨文字の中には、虎や牛と並んで「羊」の文字が見出される。この文字の発生は紀元前五〇〇〇年ごろと推定される。人類が農耕民として定住し、牛や羊が身近かにあった証拠である。——

この甲骨文字が漢字の祖先と見なされるものであるが、文献としては、紀元前二〇〇〇年代後半（殷の時代）になって始めてこの漢字があらわれて来る。——その漢字の中に「羊」という字が、羊の形を象<sup>かたど</sup>って、まがった角二つ（𦍋）と、四つ足と尾（𦍋）とを合わせて羊という字に組み立てられて早々と出来上った。曲った角を羊の特色として捉えている

点など、この羊という動物が野生ではなくて身近かな家畜として親愛の目で見られ観察されていた結果としか考えられない。——身近かな「羊」は、シナの人々にとって「善」きものだったにちがいない。

羊の性質が「善良」温順であったために、「善」という観念は「羊」が先ず前提として想い起こされ、「善」という漢字を作るときに、この「羊」の文字を取って「羊」＋「𦍋」＝「善」という字に作り上げたのである。

また、家畜の中で、羊は必ず「むらがって」行動する特性をもっていたので、「むらがる」という言葉は、「羊」の字に「君」の字を足して「群」（羣）の字を宛てた。——その羊の群れは、遠目にも白く輝いて美しいものだった。「美」（うつくしい）という観念は、羊を措<sup>か</sup>いては考えられなかった。そこで、「うつくしい」という漢字を作り上げるときに、シナの先人は「羊」の字を基にして「羊＋大」＝「美」という漢字を作り上げた。——羊は「善」にして「美」であるだけでなく、また「義」（ただし）の観念でもあった。義の字も「羊＋我」というように「羊」から作られた漢字である。

大アジアの西端イスラエルで、羊が「善」であり「美」であった時、はるか東方のシナ大陸でも、羊は「善」にして「美」のものであった。紀元前二〇〇〇年ごろのとき、この二つの文化の間に相互の交流があったとは考えられない。——こういう一致は、つまり、人間本来の「ちえ」であり、「羊」一般の特性が人間に与える印象や効用が「善美」だったことに由来する。

文化発生時からお互いに全くの交流や接触がないと考えられる諸文化圏には、日常生活に密着した生活文化財に関する用語が、不思議と同じような発音をもって幾つか発見される。——世界中を廻って見て、日本と中国を除いては、「市」(市場)はどこでも「バザール」「パッサール」であり、「羊」は「シープ」「シャープ」であったことは、私には驚きであった。——日常生活に密着し、どの民族にも必要だった市場や羊が、同じような「ことば」で表現される、という人間のちえの神秘に、いつも私は深く胸を打たれる。羊は英語で 'sheep'、独語で 'Schaf'、デンマーク語で 'sjaap'、等々である。

同じことが「茶」(ティ・チャ・テエ)「珈琲」(コーヒー、コピ等)にも言われるが、これは歴史が浅い。それにしても、「市場で茶か珈琲」という場合には、インドネシアでも中近東でもヨーロッパでも、ことばに不自由はしない。人類はやはり一つなのである。

\*

羊が善にして美にして義であることは、世界共通の観念だった。その善美で真(義)なるものをオトリ看板にして、悪しく且つ美味でないものを売る不義の行為を、漢文学では「羊頭狗肉」(羊頭を懸<sup>か</sup>げて狗肉を売る)〔無門関〕といい、また「羊頭馬脯」(羊頭を懸<sup>か</sup>げて馬脯を売る)〔漢書説苑〕ともいった。

聖書には 'sheep and goats' (善人と悪人) という成句があり、羊を善人、山羊を悪人の表象としている。羊が温和善良なのに対して、山羊は荒々しく悪さの印象が強かったからである。温和善良な羊と対立する

ものは、狼である。英語に 'a wolf in sheep's clothing' (羊の皮を着た狼) という成句がある。イソップ物語に由来しているのだが、温和善良をよそおった險悪危険な人物、という意味である。

紀元前三〇〇年ごろに編纂された『アイソーポス寓話集』 "Aesop's fables" (イソップ物語) には、狼と羊に関するものが八話もおさめられている。——温和で善良な羊を愛<sup>いと</sup>くしむ生活感情から生れた「生活のちえ」であった。

旧約聖書の『創世記』の始めの部分をつづけよう。

人間の始祖アダムとエヴァの二人の子、カインとアベルの兄弟のうち弟のアベルは羊の「初生児」を供えたので主なる神(ヤーヴェ神)に喜ばれた。地の産物を供えたのに、主なる神に顧みられなかった兄のカインは、怒って弟アベルを野原に引っぱり出してアベルを殺した。——

(これは牧畜の将来の有望性をねたむ農耕の挑戦だ、とも解釈できる)。

——カインは神の怒りに触れて、以後、地上を放浪する身となるが、やがて地上に人間が増えてゆき、世は乱れて、悪も地上に満ちた。(『創世記』四章一——六章十一)

主なる神(ヤーヴェ神)はこの暴虐の人たちを滅ぼそうと、四十日四十夜、大雨を降らせつけて、地上を大洪水で覆った。(『創世記』六章一——八章) ——(聖書に記されている大洪水は、最近、地球の歴史の中で実際にあったことだ、と考古学的にも証明された)。ただ、信仰あつたイノアは、神の命令に従って事前に巨大な「はこぶね」を作り、ノアの一家と地上の動物の各一組だけは、この「はこぶね」の中に避難して生

き残った。——洪水のひいた後に、主なる神（ヤウヴェ神）は地上を祝福して、

生めよ、増殖よ、地に満てよ！

と言われ、人間も動物も再び地上で増えていった。

やがて、イスラエルの人々は、「羊を飼う者」（遊牧民族）として、その生活をかためて行ったようである。——後述の、族長アブラハムの曾孫にあたるヤコブの子どもたちは、飢饉のイスラエルの地を逃れてエジプト王（パロ）の前に食糧を乞いに赴いたとき、彼等は王に向って、「我々は羊を飼う者です。われわれも、われわれの先祖もそうです」と答えている。

その羊を飼う民族の中に、アブラム（後にアブラハムと改名）という種族の長があらわれた。歴史的には、紀元前一九〇〇年——一七五〇年のころ実在した人物だった、と言われている。

遊牧の長としてのアブラムは、カルデアのウルからハランを経てカナンの地まで移動していった。「アブラムはハランを出たとき七十五歳だった。アブラムは妻サライと弟のロトと、集めたすべての財産とハラんで獲た人々とを携へてカナンへ」赴いた。（『創世記』十二章五）。

彼の財産とは何か？

「アブラムがエジプトに入ったとき」（『創世記』十二章十四）「王は……アブラムを厚くもてなしたので、アブラムは多くの羊、牛、雌雄のろば、男女の奴隸及びらくだを得た」（『創世記』十二章十六）と記されている。——この記述によれば、これらが大変な富のように暗示されて

いる。彼等にとって「富」（財産）とは、（人手の数以外は）羊を主体とする家畜の数であったのである。「アブラムは家畜と金銀に非常に富んでいた」（『創世記』十三章二）。

「アブラムと共に行ったロトも羊、牛及び天幕をもっていた。その地は彼等を支えて共に住ませることができなかった。彼等の財産が多かったため、共に住めなかったのである」（『創世記』十三章五、六）と記されているように、金銀を除く主なる財産（Substance—英訳聖書）は、羊の群、羊の数であった。

その財産の中で、三歳の雄羊が最も貴重だったようである。主なる神への供物には三歳の雄羊が中心に選ばれた（『創世記』十二章十五）。——つまり、その富（財産）の中で、最も大事な「愛しいもの」を捧げるのが、主なる神への信仰の証しであった。

\*

子宝に恵まれなかったアブラハムが一〇〇歳になったとき、今まで不妊だった妻サライが神の御召しによって男子を出産する、という奇蹟が起った。その愛息はイサクと名付けられた。可愛い、可愛い子宝であった。

ところが、主なる神は、アブラハムの信仰を試みるために「汝の愛するひとり子イサクを（羊の代りに）燔祭（はんさい）」として我れに捧げよ」と命じた（『創世記』二十二章、以下も同じ）。——アブラハムは神の命ずるままに、朝早く起き、その子イサクを連れて、神が示された山に出掛けた。アブラハムは燔祭の薪をその子イサクに背負わせ、手に火

と刃物とを執<sup>と</sup>って、二人一緒に山に登って行った。イサクは父アブラハムに言った、

「父よ、火と薪とはありますが、燔祭<sup>はんさい</sup>の小羊はどこにありますか？」  
アブラハムは言った、

「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えて下さるであらう。」

アブラハムは祭壇を築き薪を並べ、その子イサクを縛<sup>しば</sup>って祭壇の薪の上に載せた。そしてアブラハムが手を差し伸べ刃物をとってその子を殺そうとした瞬間、神の使いが、

「アブラハムよ！」

と彼を呼んだ。彼は答えた、

「はい、私はここにおります。」

御使<sup>み</sup>いが言った、

「童<sup>わらわ</sup>を手にかけてはならない！ また何も彼にしてはならない。汝の子、汝の独り子をさえ我れのために惜しまないのであるから、汝が神を恐れる者であることを我は今知った」

この時、アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、藪<sup>くさ</sup>に角<sup>つう</sup>を引っかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムはその羊を捉えて、それを我が子の代りに燔祭として神に献<sup>たま</sup>げた。

アブラムは主なる神から大いに祝福され、アブラハムはイスラエル民族の始祖となった。

最愛の独り子を捧げさせるほど神への供げ物はきびしかった。その供げ物に幼<sup>おきな</sup>い羊が使われたことは、小羊が独り子のように「愛する」とい

しい存在であることを物語っている。——羊は、遊牧民にとっては必要不可欠の「愛すべき」「善き」ものだったのである。

\*

遊牧民にとって、家畜は彼等の財産であった。「羊」が人間生活の中に家畜として緊密に入ってきたと思われる紀元前一九〇〇年から一七五〇年頃にかけてイスラエルの民の種族の長であったアブラハムの時代には、種族の長は、自分の力量を、まず「羊」という財産の量で示した。

ところが、その財産は、生き物の多量の数量であったために、その財産を支えるためには、当然、土地の広がりが必要とした。——肥沃な土壌と一年中明るい太陽に恵まれている熱帯地方、例えばインドネシアなどでは、檳榔椰子<sup>びんろうやし</sup>の木が五本もあれば、その一家は一生食うのに困らない豊かな財産の持ち主だ、と言われている。——高燥の荒地に生活する遊牧民の生活とは対照的である。

また、日本のように農耕を主体としている民族の場合には、全土の十％にも満たない農耕面積の狭い土地の中で、実に多くの人口がその狭い「区切り」を守って営々とその土地からの「生育物」を密度高く生産させて、かろうじて生き長らえている状況である。……この日本が、農耕をやめて、その代りに羊だけで生きて食ってゆこうとするならば、現在の農耕面積の二〇倍以上の広大な土地が必要とされる、と言われている。——この土地の広がり、日本人には、容易には想定することのできない観念である。

\*

あたらしくカナンの地に移ってきたアブラム（後にアブラハム）に対して、主なる神（ヤーヴェの神）は、

「汝の目を挙げて汝の居る処より西東北南を眺望め。凡そ汝が観るところの地は、我、これを永く汝と汝の末裔に与ふべし」（『創世記』13章15）

と、極めて漠然とした地域を指示する。——これを見ると、昔は、その大高原の中の一番高い所に立って、そこから見渡せる限りの範囲の土地が、その種族のものとなった、というような社会的な「きめ方」が行われていたことが推測できる。

アブラムも、その弟ロトも、カナン近くの地に到着して、そこに定住しようとしたとき、両者のもつ「羊・牛・天幕」という財産は、その数と量が極めて大（great）だったために（『創世記』13章5）、一つの土地区画の中ではどうしても、この生きている財産を支えることが難しくなったのである。——この羊たちを生きながらえさせることが、直接にこの遊牧民の人間生活を生きながらえさせることに結びついていた。——当然、この財産（羊）を生きながらえさせる生存競争が起る結果となる。

「アブラムの家畜の牧者と、ロトの家畜の牧者との間にあらそいありき」（『創世記』13章7）

土地の上の草と、土地の中の水とを確保しようとする牧羊者の執念であり、羊という生き物への愛情（愛着）である。

「我等は兄弟の人なれば、請ふ、我と汝の間および我が牧者と汝の牧者

の間にあらそひあらしむるなかれ。地はみな汝の前にあるにあらすや。請ふ、我を離れよ。汝もし左に行かば我右にゆかん。又汝右にゆかば我左にゆかん、と」（『創世記』13章8・9）

「弟のロトは目を挙げてヨルダンの低地をあまねく見渡すと、すみずみまで潤っていたので、ロトはこの地を擇びとって東に移った。そこでアブラムは高地のカナンの地に住んだ。こうして彼等は互に別れた。」（『創世記』13章10—12）

こうして生存競争は、話し合いから「契約」‘made a covenant’ という行為で解決するようになる。

アブラハムがゲラルの地に移ったとき、ゲラルの王アビメレクとの間に、水の井戸のことでいざこざがあった。

「……そこで、アブラハムは羊と牛とを取って之をアビメレクに与ふ。斯て二人、契約を結べり」（『創世記』21章27）。

聖書の中で、人間同士の「契約」‘covenant」という言葉が出てくる最初の事件である。——何年か何十年かに一遍ずつ牧羊地を移動して歩く遊牧民にとっては、羊を養うために、その都度その都度、土地専有の「とりきめ」が必要だった。種族長相互、個人と個人相互間の「契約」という行為は、遊牧文化にとって古くから根源的に地についたものであった。

これに対して、「お上」から与えられ定められた「縄張り」の耕地の

中に小さくひそんで営々とはたらく農耕民族の日本人には、相互間の「契約」という取り決めの考え方はなかった。日本民族にとって「契約」という考え方は古来なじみが薄かった。——西洋化された近代社会になって始めて、西洋に倣<sup>まね</sup>って「契約」という社会的行為が日本の社会に植えつけられたに過ぎない。今日の日常生活の中では、依然として「契約」という固苦しい取り決めは明確には行なわれていない現状である。

\*

自分に属する「羊」を保護しようとする愛情(愛着)から、「契約」‘covenant’ という考え方が遊牧民イスラエル人の間に根強く生れ育った。

だから、彼等の信ずる唯一の神(ヤーヴェの神)と人間との間の関係も、「契約」という観念で考えられた。

アダムとエヴァの生んだ子孫が次々に生まれ殖えて行って、やがて地上に悪がはびこっていったとき、ヤーヴェの神は地上を大洪水で被って人々を滅した。——神の命令によって箱舟の中に逃れたノアとその一族に対して、洪水が終ったとき、ヤーヴェの神はノアに対して、

「見よ、我、汝等と汝等の子孫…との間に契約を立てん」(『創世記』9章9)

と告げ、その契約のしるしとして‘for a taken of a covenant’ 雲の中に虹を置いた。

この神と人との契約、という考え方が、世界中でこのイスラエルの民たちだけに特にすぐれて特長的である。イスラエルの民にとっては、ヤ

ーヴェの神は、人間に似た極めて人間的な神である。だから、神と人との間には、人と人との間と同じような契約が行なわれる。——この契約が守られている限り、人は神から祝福され保護されるのだが、一旦、人間の方からこの契約を破ったとなると、神は厳しく罰する神となり、又怒れる神ともなる。

この「怒れる神」と「人」との契約の歴史を綴ったのが「旧き契約の書」‘the Book of the Old Covenant’ (旧約聖書)なのである。これは又‘the Old Testament’とも訳されている。

この「旧き契約」に対して、神と人との間に、神の独り子イエスを媒介人(なかだち)に置いて、神への取りなしをした新しい契約のストーリーを綴った聖典が「新しき契約の書」‘the Book of the New Covenant’ (新約聖書)なのである。これは又‘the New Testament’とも訳されている。——神の子イエス・キリストは、聖書によれば「神の羔(こひつじ)」と言われる。飼い主が愛しみ育てた最愛の仔羊を屠<sup>はら</sup>り捧げる「神の傷み」(犠牲)が、罪ある人々を神にとりなす救いとなるのである。ヤーヴェの神の祭壇に幼く清い仔羊を犠牲として供えるイスラエル民族の、五〇〇〇年にわたる習俗を疎外視しては、この新約の教え、つまり、キリスト教も、キリスト教文化も理解できない。「仔羊」の犠牲を媒介(なかだち)とした新しい契約の思想であり、信仰である。——日本人にとっては極めてなじみの薄い「契約」の考え方である。

\*

その「契約」とは、本来、「羊」の生存権及び羊にかかわる人間生活

の生存権のための「証（あか）し」であった。その証しにも矢張り「小羊」が用いられた。

紀元前二〇〇〇年のころ、イスラエル種族の長として統率力と戦力とをもっていたアブラハムが、ゲラルの地に入って、ゲラルの王アビメレクに威圧感を与えた。やがてアブラハムと王アビメレクとの間に「契約」が結ばれた。（『創世記』21章25以下）

「アブラハム、牝の仔羊七つを分ち置きければ、アビメレク、アブラハムに言う、

『汝、この七つの牝の小羊を分ちおくは何のためなるや？』

アブラハム言ひけるは、

『汝、わが手よりこの七つの牝の小羊を取りて、我が、この井戸を掘りたる証拠（あかし）とならしめよ』と。

彼等二人、彼処にて誓ひしによりて、其の処をベエルシバ（盟約の井戸）と名づけた。斯く彼等、ベエルシバにて契約を結び、アビメレクと其の軍勢……は起ちてペリシテ人の国に帰りぬ。……斯くしてアブラハムは久しくペリシテ人の地に留まりぬ」（『創世記』21章34迄）

たったの七頭で、これだけの土地が入手できたのである。——ところろが実は、その七頭は大変高価な代償なのであった。雌の小羊七頭は、生産性の極めて高い、すばらしい宝物なのであった。——これが数年経ち十数年経てば、どれほど増殖して豊かな「財産」になるか測り知れない、——つまり無尽蔵の「生きた」財産なのであった。……だから、こ

の契約の証拠、witness は安価なものではなく、極めて高価なものだった、と考えてよいのだ。——現代風に言えば、高額な「契約金」に相当するのである。

\*

「羊」は、生きている生活資源であり、人間の主なる財産であった。小羊が貴い宝物であったからこそ、供え物として特にえらばれて神に捧げられたのであり、神に捧げられた小羊一頭が、その人の信仰の深さを雄弁に物語っていたのである。

\*

その「羊」は、性温順であり、忍耐強く、飼育しやすい家畜であったようである。紀元前十世紀ごろになると、この羊という家畜は人間の間につきり飼いが慣らされてしまっていたと考えられる。

この羊は、性温良で従順である代りに、足はおそく、角は彎曲（わんまが）して、外敵には全く弱い動物だった。——当然、この羊の群れを導き、外敵から守る保護者が必要とした。——それが「羊飼（shepherd）」（シエパード）である。——「herd」は牧夫、sheep（羊、羊群）をちぢめて「shep」とし、これに「herd」を加えて shepherd「牧羊者」の意味となった。——牧草のある所を探してそこへ羊を導き、安心して草をゆつくりと食べさせ、又、水のある所を探して、そこで水を飲ませて休息させる。日の落ちるころ、一頭残らず羊群を点検してから牧舎に連れ帰る。——これは並大抵の苦勞ではないだろう。

羊飼（牧者）の身から、BC988年ごろ統一イスラエルの王となっ

たダビデ David は、この羊飼(牧者)の保護愛情を、ヤールウエ(エホバ)の神の愛にあてはめ、なぞらえて、神をたたえるすばらしい詩を多数残した。旧約聖書の中の『詩篇』の中の第二十三篇は、中でも名詩であり、古来、全キリスト教信者が常に愛唱してやまない「牧者としての神」への讚美と感謝の歌でもある。

### A PSALM OF DAVID

The Lord is my shepherd; I shall not want.

He maketh me to lie down in green pastures :

he leadeth me beside the still waters.

He restoreth my soul ; he leadeth me in the paths of righteousness

for his name's sake.

Yea, though I walk through the valley of the shadow of death,

I will, fear no evil :

for thou art with me ; thy rod and thy staff they comfort me.

### 第二十三篇 ダビデのうた

エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ、

エホバは我をみどりの野に伏させ、いこひの水際にともなひたまふ。

エホバはわが靈魂(たましひ)をいかし、御名のゆゑもて我をただし

き路にみちびき給ふ。

たとひ われ 死のかげの谷をあゆむとも、禍害(わざわひ)をおそ

れじ、なんじ我とともに在(いま)せばなり、なんじの答(こた) なんじの杖 われを慰む。(以下二節省略)

\*

羊飼いは羊群を導くために牧羊杖 Sheep-hook 又は shepherd's crook を持ち、野獣を防ぐために、石投げの道具などを身につけている。少年ダビデがイスラエル族の危機を救うために、敵軍の巨人ゴリアテに立ち向ったのもこんな姿であった。旧約聖書の中の『サムエル前書』(十七章四〇―五二まで)に、その模様が生き生きと綴られている。歴史的に言えば、BC 1040 年にイスラエル民族統一の王権を始めて樹立したサウル王の時代のことである。

\*

王サウルは少年ダビデに向つて、

「汝はかのペリシテ人を迎へて戦ふに勝はず、そは汝は少年なるに、彼は若き時よりの戦士(いくさびと)なればなり」

と悲しそうに言うのに対して、少年ダビデは胸を張つて答える。

「僕(しもべ)さきに父の羊を牧へるに、獅子と熊、来りて其の群れの小羊を取りたれば、其の後を追ひて之を搏ち、小羊を其の口より援(すけ)いだせり。しかしして其の獣、我に猛りかかりたれば、其の髪をとらえて、これを撃ち殺せり。僕は既に獅子と熊とを殺せり。……この割礼なきペリシテ人、活ける神の軍を挑みたれば、亦かの獣の一つのごとくなるべし。……エホバ、我を獅子の爪と熊の爪より援(すけ)ひ出だしたまひければ、此のペリシテ人の手よりも援(すけ)ひいだしたまわん」と。



サウル王、ダビデにいふ、

「往け！ねがはくはエホバ汝とともに在ませ！」

王から貸与された戎衣も剣も銅の兜も鱗綴りの鎧もダビデには始めてだったし、又大きすぎたため「これを脱ぎすて、手に杖をとり、溪間より五つの光滑なる石を拾ひて之を其の持てる牧羊者の具なる袋に容れ、手に投石索を執りて彼のペリシテ人に」近づき立ち向った。——素手で立ち向う少年を見て、敵の巨人ゴリアテは少年を嘲笑する。やがて、「ペリシテ人立ちあがり進み近づきてダビデを迎へしかば、ダビデいそぎ陣にはせゆきてペリシテ人にむかふ。ダビデ、手を袋にいれて其の中より一つの石をとり、投げてペリシテ人の額を撃ちければ、石その額に突き入りて、俯伏せ地に仆れたり。かくてダビデ、投石をもてペリシテ人に勝ち、ペリシテ人をうちて之を殺せり。」

牧羊者の愛情は、悪に立ち向う勇氣（義）となった。牧羊の日常の知恵は永遠の義（真理）と善（倫理）に通ずる深いものであった。——羊は「義」と「善」とに深い関わりがあった。と同時に「美」とも関わりがあった。

羊のすがたは美しい。羊のうつくしさが「美」一般の典型だったから漢字の「美」という文字も「羊」の字の下に「大」を加えて作り出されたことは前にも述べた。

その「羊」を言う場合に、ヨーロッパでは「Sheep」という語が用い

られるのであるが、このことばは不思議なことばで、一頭の場合でも Sheep であり、数頭、数十頭の複数の場合でも、単数名詞と同じ綴り同じ発音の Sheep なのである。——家畜の中で最も「群れ」をなしやすい動物が、実は羊なのである。だから漢字の「群」という字も羊の字から作り出されている。羊は一頭だけを離して観察する、という機会は大羊以外はほとんどない。（小羊は Lamb が単数で、複数の場合は、Lambs と s. をつけて単数と区別されている）。——羊はつねに群棲している。——その羊の群れが実に美しいのだ。

澄み切った蒼空の下、果てしなく拡がる若みどりの牧草の高原の上は白く、時にはすみれ色に、そして時には金色にさえ輝いて微かに動いている羊の群れの優しい美しさは、言語に絶するほどである。

スコットランドの高地やアルプスの山中で羊の群れを見たときの美の感動を、私は今でも忘れられない。——この美しさは、日本の田園や山林に住んでいる限り、日本人には想像できないものであろう。日本の風土には存在しなかった美の観念である。

父王ダビデ David の跡を継いで全イスラエルの第三代目の王となったソロモン Solomon は、イスラエル王国を隆盛の極みにもっていった名君であり、後世「ソロモンの栄華」と謳われた華麗な存在であったが、同時に「ソロモンの知恵」と絶讃された鋭い機智と博識と豊かな詩藻の持ち主でもあった。その治世は BC 961 年から BC 922 年の間であるといわれる。

神と人とのかわり合いの歴史を記した聖書には、愛や性や女性美を謳った記述はほとんど見当たらないのは当然であるが、旧約聖書全三十九書の中で、ただ一書だけ、おどろくほど美しく大胆に歌われている詩集が収められている。“The Song of Solomon”（日本語訳の聖書では『雅歌』）と名づけられている全八篇の詩集である。

数百人の美女を愛した王ソロモン。アラブ南端の国シヘバ、SHEBAの国から世界最高の美貌の持ち主といわれた女王 Queen of SHEBA がある。はるばる三カ月もかかって首都エルサレムの彼の王宮まで会いにやってきて愛を愛を打ち明けた、という北の国の英雄であり理想的男性像だった王ソロモン。——そのソロモンが、女性の美しさを、女性の「からだ」の一部一部を取りあげて高らかな調子で謳い上げているのだ。

そして、女性美の形容のために使われる比喻は、谷の百合花であり、藜であり林檎であり乳香であり没薬であり大理石である中に、

「わが妹、わが新婦よ」（4・12）

「ああ、なんじ美しきかな」（4・1）

「なんじの齒は毛を剪りたる牝羊の浴場より出でたるがごとし、おのの雙子をうみて一つも子なきものはなし」（6・6）

と、羊のすがたになぞらえて女性美を礼讃している表現が見られる。

はじめこれを読んだ時にはちょっと奇異に感じられる比喻であるが羊のすがたの美しさが定着している遊牧の風土を想定するならば、この形容は、なるほど、と納得のゆくすばらしい表現であることが判るのである。女性美の重点は、こういう羊のほかに、愛すべき小動物も比喩

として使われている。

「なんじの髪は、ギレアデ山の腰に臥したる山羊の群れに似たり」（4・5）

「なんじの両乳房は、牝羊の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草食するに似たり」（4・5）

洗い場から上って来た「羊」は、欽定訳聖書では“a flock of sheep”（羊の群れ）となっている。羊の群れはこのとき陽の光を受けて黄金色に輝いていたかも知れない。——この羊の群れの美しさに驚くところがすばらしい詩を生んだ。

ソロモンが支配していたイスラエルの地とは、当時恐らく無縁だったと思われるギリシャの土地でも、丁度そのころ、つまり紀元前一〇〇〇年のころ、偉大な詩人ホメロスは「金色の羊の毛」を追い求める英雄たちの冒険を綴った雄大な叙事詩『オデュッセイア』“Odysseia”を謳い上げていたのである。

\*

## 第一篇 羊毛の起源

第一章「黄金の羊毛」伝説

第二章「オデュッセイア」における

牡羊の位置

第三章「紡ぐ」ことの発明、起源

第四章「織る」ことの発明、起源

第五章 古代ギリシャで「羊毛」の手織り

補説 田園詩・牧羊詩 (Pastoral)

### 一、「黄金の羊毛」伝説

西欧の文化にとって、ヤーヴェの神の教え（聖書 Bible）と、古代ギリシャ文化、その中でもとりわけホメロスの叙事詩とが、その母胎であり、その根幹を成している、といわれている。——ところが、ホメロスまたはホーマー Homer の名は誰れでもが口にするくせに、ホメロスの『オデュッセイア』や『イーリアス』の大叙事詩を読み通した人となると、西欧の教養人種でも、ほとんどいないようである。

\*

ところで、そのホメロスの『オデュッセイア』の物語は、実は、「黄金の羊毛」を探し求めるアルゴス船の出帆と冒険とが、その端緒となっているのであった。

「黄金の羊毛」伝説！

「黄金色に輝く毛をもった羊！」

とは、なんと輝やかしい発想であろう！

——「黄金」が当時としても最高の価値であり、「羊毛」が一般にとっても貴く必要なものであった、という二つの観念が一つに結びついて、世界最高価値の「黄金の羊毛」という伝説が生まれ出たのであろう。——このたった一頭分の「黄金の羊毛」のために、選りすぐった英雄たちが、人智を超えた苦難と危険と死とに曝されるのであるが、このギリシャの有名な伝説を、ギリシャ全盛期のアテネの劇作家たちは挙って文学の題材にした。中でも紀元前三世紀にロードス島のアポロニオスという詩人は、この題材を集大成してすばらしい叙事詩を作ったのだった。

\*

ギリシャ半島の南部近くアテネの北にあるポエオティア地方のオルコメスの都（くに）は、飢饉のためにひどい食料難におそわれた。——これは神々の怒りにちがいない、とオルコメスの王アタマスは、自分の息子プリクソスを犠牲として神々に捧げて、この食料難を救おう、と決心した。

父王の計画を知った少年プリクソスは、妹のヘレーといっしょにこの都から逃げ出そうとした。……二人の子どもを可哀そうに思った一人の女神ネベレが、二人のために「金色の毛の生えた一頭の牡羊」をつれて来て、二人の子供をその牡羊の背中に乗せた。——その牡羊なら、子供たちを安全なところへ連れて行ってくれるだろう、と女神は信じていた。

「金毛の牡羊」は子供たちを背中にのせたまま空中に舞い上り、東の方を指して空中を飛んでいった。……しかし、海峡の上にさしかかったとき、その金毛の牡羊がからだを揺り動かしたため、妹のヘレーは牡羊の背中から離れてその海峡の海の中に落ちて死んでしまった。——ギリシャ人は、この妹娘ヘレーを偲んで、黒海の入口にあるこの海峡のことを「ヘレーの海（ポントス）」↓「ヘレーポントス」海峡と呼んだ。現在のダーダネルス海峡のことである。

黄金の羊はなおも空を飛びつづけて、やがて黒海の東海岸にあるコルクスという国に着くことができた。……王子プリクソスは羊の背中から降りて、命の助かった感謝のしるしとして、この羊を生贄として軍神アレス（又はゼウスだ、という説もある）に捧げ、羊から剥いだ「黄金の毛皮」を、この王子をあたたく迎えてくれた当地コルクスの国王アイエテースに贈った。

国王アイエテースは、このすばらしく珍重な宝物「黄金の羊皮」を神に供えた森の中の祭壇の所に吊り下げて、「眠りを知らぬ竜」に、この毛皮を守らせることにした。——国王はそれだけでは満足せず、更に万全を期すために、一切よそものがこの地コルクスに立ち寄ることを厳禁して、万一、この禁を犯す者は死刑に処す、と宣告したのである。

これより約二十年前、テッサリアのイオルコス王アイソンは、ポセイドンのペリアスに王位を奪われ、幼なかつたアイソンの息子イアソン王子は知人に隠まわれて森の中で育てられ、二十年後には力強く勇敢な

青年に成長していた。

ある日、この王子は豹の毛皮を着、槍を二本持って「まち」の市場にあらわれ、ペリアス王に向って奪われた自分の王国を私に返せ、と主張した。……ペリアス王は、単純な考えのこの王子イアソンに「王位を返そう」と約束したが、それは、条件つきだった。——王は、王位を返す代償として、

「例の金の羊毛をもって来い！」

という至難の仕事を王子イアソンに命令したのである。

そこで、イアソンは、「アルゴ」という大船を作り、ギリシャ一番の勇士たちの参加を得て、長い冒険の航海に出るのだった。船はヘレスポントス海峡でトロイの軍にさまたげられたり、そのほか実に多くの試練ののち、とにかくアルゴ船は目的地のコルクスに着いたのだった。

そのとき、コルクスの海岸で、コルクス王の娘メディアに会い、この魔力をもった妖姫の力によって、なんとか「黄金の羊毛」はイアソンの手に入るようになるのだが、この妖姫メディアが王子イアソンに会った日のことを『ギリシャ年代記』では、紀元前一二五〇年のことだ、と記している。

アメリカの歴史家 Will Durant (ウイル・デュラント) の “The Story of Civilization” (文明の歴史) によれば、この伝説は歴史の断片的事実の上に新しい作り話がつけ加えられたものが多いから、ギリシャ

人が植民と貿易のために、アルゴ―船が辿ったと同じように、ヘレーズポントス海峡を通じて黒海の開拓を企てたことは大いにあり得ることだ、と推定している（ギリシヤ史篇Ⅰの2）。

そして更に、ホメロスの詩に明示された文明の姿は、その根本的性格において「事実」を述べたもの、とするのが現代学問の大勢である。そして、この文学史上有名な「黄金の羊毛」とは、実は「羊の皮」または「羊の布」のことを言っている、と推測される。——小アジアの北部では、そのころ、下流に押し流される砂金を採るために、羊の皮、または羊の布が使われていた、と考古学者は考証しているからである。

\*

砂金がまといついた羊の布や羊毛は、深い碧空の下、明るい太陽の光に目眩るめくように光り輝いたことであろう。そして今や、「羊」それ自身ではなくて「羊の毛」（ウール）というものが、貨幣や黄金にまさる価値として人々から貴ばれ憧れられていたことが、この神話伝説においても判るのである。

## 二、「オディッセイア」における牡羊の位置

ところで、「黄金の毛をもつ牡羊」は、二人の子供をその背中にのせて天空をはしつたくらいだから、きつと体も大きくて立派な牡羊だったろうと思われる。

深く明るく澄みわたった夜空に鏤められた数多くの星の配置の中に、古代ギリシヤ人は、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、の三つの星と、もう一つの星とをえら

び出して、これを「金毛の羊」の頭部と尻尾に見立てて「牡羊座」ARIESと名付けた。この星座は古くは「白羊宮」とも言った。——そして、昔からこの星座にあてはめられる牡羊の絵は、いつも大きく逞しい姿で描かれて来ている。——また、この星座を初めて羊と見た古代カルデアでも、春分点を示す神聖な天の羊として、逞しい姿で想像されていたようで、カルデアの羊飼いたちの間で神として仰がれていたのである。

\*

乳を出し仔を産む雌羊よりも、また愛らしく小さな仔羊よりも、どうして大きな牡羊が尊ばれていたのだろうか？

アブラハムがわが子イサクの代りにヤ―ヴェの神に牡羊を供えて以来旧約時代の「いけにえ」は牡羊に限られていたし、古いエジプトでも「生ける雄羊」が聖なる羊として広く崇拜されていたことが、古代ギリシヤの歴史家ヘロドトスの『歴史』の中でも報告されている。——この「生ける雄羊」が死んだときには人々は喪に服したが、逆に、新しい立派な牡羊が見つかったときには、人々は喜びに湧きかえって、このエジプトの「動物の王」の即位のために大がかりな祭典を行なった、という。

立派な牡羊は、古代の人間生活にとって大切なものであったのである。それは、飼育繁殖にとっても、食用の資源としても、そして更に、豊かに長い羊毛の供給源としても、牧畜人間にとっては黄金にも換え難い価値なのであった。

ギリシヤ時代より五〇〇年以上経った紀元前四世紀以後のローマ人でさえ、牛や羊を主体とする家畜のことを「ペクス」と呼び、お金のことを、同じ語源から出た語の「ペクニア」と呼んだ。——家畜はお金であり一種の貨幣であり市場価値の基準であった。

牡羊 ram から採られる羊毛と、牝羊 ewe から採られる羊毛とは、どちらが質的にすぐれているのか、羊毛産業の専門家にお聞きしたい点であって、私には今の所よく判らないのだが、とにかく、紀元前一〇世紀頃から紀元前四世紀頃までの古代ギリシヤの世界では、どういうわけか、牡羊が貴ばれていた、というのは、私にとってはまことに不思議な発見であった。

ホメロス、という詩人は実在しなかったかも知れない。しかし、ホメロスという作者の名による偉大な詩は残されている。——その「ホメロスの詩」は初期ギリシヤ（BC 1300—BC 1100年）の時代より少くとも三〇〇年後に作られたものである。そのホメロスの叙事詩『オデュッセイア』は、英雄オデュッセウスが、トロイ攻略のち、部下と共に帰国の途次、ここかしこを流れさすらった冒険の物語である。

オデュッセウスの一行がキクロプスの島にたどりついたときのことである。この島の住人は一つ目の巨人の羊飼いであった。それとは知らずに、巨人の洞窟に迷いこんだオデュッセウスの一行は、牧場から羊を追って帰って来た山のような怪物の巨人に捉まって一人二人と食べられて

しまうのだった。

オデュッセウスは一計を案じて、巨人にギリシヤ酒の大盃を飲み干させ、始めて飲むこの美酒の美味に酔いしれて眠りこんだ巨人の隙をうかがって、先端が真赤に焼けた大きな棒杭を巨人の一つ目の中にえぐりこんだ。盲目になった巨人は、血みどろになりながら戸口を探そうと、洞窟の入口にある巨石を取り除いて、どっかと坐り、洞窟の中にいる羊の群れにまぎれて出てゆく人間が一人でもあれば、すぐにも引っ捉えてやろうと、手探りをしていた。

もう夜も明けかかって来ていたので、羊はいつものように牧場に出かけはじめた。羊の群れの中に「肥え太り、董いろの羊毛、房々したる、美しく大なる牡羊」が沢山いた（英訳本では the rams of the flock）。「とりわけ最も立派なる牡羊一匹ありしが、その背を彼は摺み、そのむしゃくしゃの毛の腹の下へ丸くうずくまりて横たわりぬ（under their thick-fleeced bellies）」。

盲目の巨人は、自分の前を牡羊の群れが通りすぎてゆくときは、牡羊の毛並み豊かな背中を手探りで触るのだったが、その腹の下にオデュッセウスの部下たちが一人一人かくれていようとは夢にも考えなかった。そして、最後の牡羊がオデュッセウスをその毛にくるんで巨人の前を通り過るときも、巨人はやはり手でさぐったが、やっぱりそれと判らずにその牡羊を通り過ぎてしまった。（『オデュッセイア』第九篇）

こうして一行は、英雄の機智により、無事、危機から脱出できたのである。雄大な牡羊の豊かな羊毛のおかげであった。——オデュッセウス

は自分を救ってくれた牡羊 Great ram に対して、親しい人間に語りかけるように「親愛しの牡羊よ、(“Dear ram!”)と語りかけるのだった。

——牡羊のもつ豊かな羊毛への古代人の親愛とあこがれが、この叙事詩の一節にはっきりと見て取れるのである。この表現を見ても、日常生活の中に、もう既に羊毛はあたたかく入りこんでいた、と解釈できるであろう。

\*

その有難い、そしてまことに快よい羊毛を、人類はいつ身に着けて、これを衣服としたのであろうか？

多数の熱心な考古学者たちの広く長くたゆまぬ発掘の努力にもかかわらず、石器時代、新石器時代(紀元前一六〇〇〇年前後から紀元前三〇〇〇年前後まで)の遺物の中には衣服の片鱗さえ残されていないのだ。

(註1)

恐らく、野生か飼いならし始めた羊から毛皮や羊毛を取った人間は、それを身の廻りに置き、あるいはそれを身に着けているうちに、それがフェルト状になることを知ったようである。——それは、中央アジアのチベットの原住民が嘗てやっていた習俗からも想像されよう、と James Launer は推理している。

\*

やがて、人間は、羊毛を一本一本「くし」で梳き分けて、その細かい繊維をいとおしむようになった、と考えられる。その一本一本のセンチがいつの間にか一本の長い糸につながってゆく——という「不思議」を人

間は発見した。「紡ぐ」という人間の大きな生活の知恵であり、偉大な発明であった。

### 三、「紡ぐ」ことの発明、起源

ところで「紡(つむ)ぐ」という技術(craft)を人間が考案発明したのは、一体どのくらい昔のことだったのだろうか？

紀元前四万年ごろと推定されるネアンデルタール人が生きていたころつまり旧石器時代の中でムステリアン期とソルトレアン期といわれる時期に、人間は、車と火と針、を発明したといわれている。——この人類の三大発明といわれるものに次いで、「紡ぐ」技術は、人間の技術文化発達史上、特筆すべき発明であった。

参考文献の一例 (Daumas 著 “A History of Technology and Invention”)

\*

その「紡ぐ」技法がいつごろから行われていたのか、文化史的にも明らかではないが、エジプトのファユム湖畔で、世界最古の「紡ぎ」の道具が発掘され、それらが新石器時代に入ってからのものだと考証されたから(註2)、「紡ぐ」ことは、紀元前五〇〇〇年ごろ以後行なわれたものと推定される。——そのころは、まだ農耕文化の段階で、羊はどの地方でも飼育されてはいなかったと思われるから、使われるセンチは植物からのものが主体だったにちがいない。

始めのころは、植物のセンチをさいたり、毛髪を束ねたり、動物の皮

を細くさいたり、動物の腱を取り出したりして、それらをそのまま「糸」の代りにしたり紐に使ったりしていたのが、やがて、何本かのセインを膝の上で縫り合わせて結び目のない長い糸や好みの太さの糸や紐などを作り出すようになった。……やがて、人間は、一つの道具を使って、均等な「糸」を科学的に作り出すことを発明したのである。——ふしぎなことに、お互いに何らのコミュニケーション（知識交流）もなしに、広い地球上の人間が、夫々別の地域に隔絶したまま何万年と暮らしていながら、それでも大体同じ時期に、同じ機構の「紡錘（つむ）」spindle（スピンドル）というものを使いはじめた、ということは、驚くべき人間の根源的で普遍的な「ちえ」といふべきものであろう。

\*

エジプト・ファユム湖畔の遺跡から発掘された遺品から推定すると、世界最古の「紡ぎ」spinningの仕方は、現在のアラブ系の農民たちがやっている技法に極めてよく似ている。——しかし、少し違う点もある。現代のいわゆる「紡錘のはずみ車」の形をした円盤の、中央の穴に円盤と垂直になるように比較的大きな「紡錘（つむ）」spindleが差し込まれていて、紡錘が均衝を保って回転するようになっている。そして紡錘の先端は小さな釣型になっていて、紡がれた（撚りがかかって出来上がった）糸が紡錘に巻きとられたあと、それをここにちょっと引っかけておいて、糸がほどけるのを防ぐようになっている。セインの束が縫られながら、ある長さに引き出されると、そこで「糸」が出来上がったことになり、この仕事をする人は、ここで「紡錘」spindleをまわすの

を止めて、出来上がった糸を、その紡錘のまわりに巻きつけるのである。——紡錘の軸棒の真上のほうから引っばって来た糸を、こんどは紡錘の軸棒に対して直角になる水平線の上の方にもってゆき、そこで又、はずみ車をまわすと、糸を軸棒の上に「紡錘状」にまきつけてゆくこともできるわけだ。（これを「ころがし錘」という）。

もう一つのやり方は、セインの束を部屋の天井から吊り下げるか、又は横木のようなものを組み立てて、それから吊り下げる、という方法である。——上から下にセインを引っばるため、紡錘の大きさは、前の場合よりも一段と大きいものが使われた。紡錘の「錘」は「おもり」という意味である。上から吊り下げられた紡錘spindleを両手で回転させて、セインを撚りながら細く長く引きのばして「糸」としたのである。（これを「吊し錘」という）。（註3）

\*

紡錘（spindle）の軸棒の底辺に「はずみ車」をつけたことが「紡ぐ」spin作業を能率的に進めた。紡錘は、はずみ車の調子に乗ってグルグル旋回する。「紡ぐ」を意味する英語spinには、グルグル旋回させる、という語義がある。紡錘（スピンドル）は旋回するのが道具としての特徴である。日本語では「紡績機」のことを、一般には「いと（くり）ぐるま」と言っ、紡車の字を当てている。

\*

新石器時代以降になると、古代文化圏の各地で「紡車」の遺物が発掘されている。「紡錘」と「はずみ車」の遺物である。——イギリスの考



古学者アーサー・エヴァンズは、ギリシャ初期のクレタ文化の発掘を志して、一九〇〇年以後、クレタの新石器時代の遺跡を掘りあてた。紀元前三四〇〇年ごろと推定されるこのクレタ初期文化の遺物の中には、単純な縞模様のある手製陶器や武器や、凍石や粘土に描かれたお尻のつき出た女神の絵などにまじって、糸を紡いだり布を織るための紡錘（スピンドル）の「みぞ車」が発見された。

そして、これより数百年後には、ギリシャ全土に羊の飼養がゆきわたって、いままで亜麻や綿を紡いでいた紡錘（スピンドル）が、そのまま、羊毛をつむいで、これをすばらしい糸にすることに応用されたのである。

\*

「つむぐ」, 'to spin' という言葉は「綿や羊毛を引っぱって、それを撚り合わせながらつないでゆき、更にそれらを撚って長い糸に作り出す」ことを総称しているようである。そして、その道具のことは、同じ語源から「つむぎ」, 'spindle' (スピンドル) と言われている。

ところで、現在の日本では、一口に「紡績」と熟して言っているが、「績」は「うむ」と訓んで「麻や苧を細く析いて長くつなぎ合わせて縫う」ことである。丁度、農家の土間で藁などで縄をなう手仕事に似ている。道具は使わない。

それに対して、日本語の「紡」は、「摘みつなぐ」という意味から出ているらしく、「綿や繭からセニを引き出して、それを引っぱり長くして糸にする」ことを意味する。——繭を煮て一本の糸の端をひっかけ

れば、それで巧みに糸が切れずに長く長く引き出すことができ、長い糸にできるのである。……だから、本来、「紡」と「績」とは別の種類の作業であった。

ところが、羊毛は、夫々のセニ（紡績業界では通称「しの」）は掌の幅に充たない短かさだから、そのまま引き出しても短かいままに途絶えてしまうはずなのに、それがいつの間にか一本が一本と絡み合って、それがつながって出てくるから、私にとってはフンギでならないのだ。

この糸がほぐれず途切れぬようにするために「より」をかけ、同じ太さに保つように工夫したのが、羊毛の紡ぎ方であった。——つまり、短かいセニ（しの）とセニ（しの）をつなぎ合わせながら（績）、引き伸ばし撚りをかけて長い糸にする（紡）のだから、績と紡とを一度の工程でやってしまう羊毛の 'spinning' は、日本語なら「績紡」という当て字がピッタリなはずである。作業工程から正確に言うならば「績紡」であって、「紡績」という現在の熟語は、文字としては逆の配列というべきであろう。

#### 四、「織る」ことの発明、起源

新石器時代に入ってから、人間は「紡ぐ」ことを知った。短かいセニのかたまりから、長い糸をつくり出すことが出来るようになった。

そして、その糸と糸とを組み合わせて、やがて人間は「織る」こと 'to weave' を知った。「織る」ことの技術 'craft' も、糸を紡ぐことに次いで人間の技術発達史上、画期的な発明であった。

しかし、この「織る」ことが、いつの時代に発明されたのか、現在のところ、考古学も歴史学も人類学も、その時期を見極めることはできていないようである。

\*

旧石器時代末ごろ迄には、既に人類は動物の毛皮をただ腰に巻きつけているだけだった、ということとは、学問的に推定されていることであるが、しかし、それに関する実証の裏付けは皆無なのである。——ただ、紀元前四万年ごろと推定されるネアンデルタール人が狼やとなかいの毛皮をからだにまとまっていた、ということだけは確実なことだ、と言われている。(註4) ——しかし、それらの毛皮をどんなパターンやスタイルで衣服というものに作り上げていたのか、という段になると、これはもう完全に想像の世界に属することとなり、SF(空想科学小説)の一大関心事となってしまうのである。何故ならば、今までのところ、皮と皮とを縫い合わせる「縫う」道具のようなものの遺物などは未だ一つとして発掘されていないからである。

骨をとがらせて錐にしたものが、その後のムステリアン期に現われている。この骨の錐で毛皮の端に孔をあけ、動物の腱などを糸の代りに使って毛皮と毛皮とを結び合わせて、なるべく寒い風を避けるように、人間はこの毛皮の服(?)を身にまとったのであろう。

\*

それから後、二万年以上の空白を経て、紀元前一六〇〇〇年ごろのマガダレニアン期になると、この期に属する彫刻の石板がいくつか発掘さ

れている。その彫刻石板の一つには、袖のついた衣服を着ている狩人の絵が彫られているから、もうこの時期には、人間が袖のついた服を着ていたことは間違いないことになる。——それは、シベリアのパルカやエスキモー人のアノラックに似ているようだ。でも、この時期の衣服の遺物というものも、やはり一つとして残されていないのである。

\*

更に一万年ぐらいの空白を経て、新石器時代(紀元前六〇〇〇年ごろ——四五〇〇年ごろ)になると、この時期に属する西南アジアやエジプトなどの村落の遺跡から、人類最初の「織物」の痕跡らしいものが発掘されている。(註5)。それは、現代の一般農民たちが着ている服に近いものだったようである。——「織る」ことの、残された証拠である。たとえば、エジプトのファウム湖底から発掘された布は、もうポロポロになってはいるが、それは植物の亜麻で織られており、その織物は、器具や道具を使わずに、手で織られた、と考えられている。——その織り方は、タテ糸を枠に張り、ヨコ糸は杼を使わないで、自分の手の指先でタテ糸の間を通していったようである。

それでも、実に見事な「織物」が出来上った。……それは、人間の生活にとって非常に重大なことが起ったことをわれわれに示している。今まで獣の皮を着ていた人間は、いまや、野に生えている亜麻属の植物から人工的な皮を作り出すようになったのである。(註6)

\*

新石器時代に次ぐ青銅器時代に属する北歐泥炭地の沼地からの発掘品

を見ると、この期初期の女は、両袖のついた長い衣（シュミーズ）を身に着け、腰のまわりにはスカートをまきつけて、それをベルトで留めて着ていたことが判る。

\*

現在までのところ世界最古と思われる「織物」の遺品は、紀元前三一九〇年ごろのエジプト第一王朝のドゥシュエール Djeh 王の遺品を包んでいた布がそれだ、といわれている。（註7）。——この布は、タテ糸六十本、ヨコ糸四十八本で織られている。（現代の上質の布でさえ、半インチあたり、わずかに糸五十六本しか織りこまれていないのだ！）。——五〇〇〇年もの大昔に、現代の人でさえ及ばない、かくも精密な「織り」が成し遂げられていたことに対して、学者たちは一様に驚嘆の声を発せずには居られないようである。

\*

織物の始まりは、エジプトに限らず、どの地域でも、まず植物のセンイで作られた。残念ながら、羊毛は、センイの糸としてはまだ織ることに使われていなかった。

羊の体毛が刈りとられて糸に紡がれ、その糸が織物に使われたのは、羊の飼養が一般に行なわれるようになり出した紀元前三〇〇〇年前後のメソポタミアのシュメル文明であり、ついで、ギリシャ本土の南、エーゲ海の中の一島に花ひらいたクレタ文明であり、それを引きつぐギリシャのアカイア文明の時代になってからであった。

紀元前三二〇〇年ごろまでは、メソポタミアでは「羊の毛皮」をその

まま体にまとうだけだったようである。（註8）。——ところが、羊を殺してその毛皮をまとうだけだと、いちいち毎回羊を殺さなければならぬ、という手間もかかるし、その上、羊は少しも殖えぬ。それに反して、羊の毛を刈りとっても、その羊は再び体毛を房々と生やしてくれて、羊は無くならない上に更に羊の頭数も殖えてゆく——羊を生かしたままその毛を刈りとることによって、「羊は人間の倉庫である」ことを人間は発見した。つまり、人間のための「倉庫」である羊を、家畜として飼養して、その羊の毛を「貯える」ことの得点を、人類は知ったのである。——これに併行して、羊の毛から糸を紡ぎ織ることの「ちえ」も開発された。それまでは、人類は羊の毛をフェルト状にして布のように使っていた、と推定される。紀元前二八〇〇年から二七〇〇年の間のことである。（註9）。——紡ぐこと、羊を飼養することで「人類」は文明的な「人間」となった。

羊の毛が糸と織物に使われるようになるまでに、「紡ぎ」「織る」との技術は、亜麻などの植物センイによって十分に工夫され開発され、改良され進歩して、ほぼ完成された段階に達していた。——「織る」機構が出来上がったときに、羊毛がその素材として、おもむろに、そして言うなれば「優雅に」登場してくるのである。

\*

紀元前三〇〇〇年ごろ、糸で織られた「布」は、既に人間の肌に「生活文化」として密着して、人間らしさを浮き出し、人間の羞恥心と愛（エロス）とをかき立てるようになっていた。

メソポタミアのシュメル文明の遺産である十二枚の文字板には、メソポタミア文学の中でも最も魅力に富んだ『ギルガメシュ王叙事詩』が刻みこまれていた。そこには、紀元前三〇〇〇年ごろのシュメルのことが生き生きと記録されてもいるのだ。

\*

ギルガメシュ王は、この地方の伝説的な支配者であり、英雄であり、背が高く、体は大きく、人間わざとは思われぬほどの怪力がある上に、すべての女性を恍惚とさせるほどの美男子でもあった。

この強力なギルガメシュに対抗するのが、イノシシのように強力で、ライオンのようなたてがみを持ち、鳥のように早く走る、王の弟エンキドゥだった。人間ぎりいで、野山を荒らしまわるので、狩人たちはギルガメシュ王に相談して、美しい尼の色気で、エンキドゥを誘惑し、彼を捕えてしまおうと工作する。

//ほら、そこに彼がいる、

尼さんよ、帯留をゆるめるんだ！

貴女の美しさを見せびらかすんだ！

彼が貴女を十分に楽しむようにねッ。

尻ごみしてはいけないぞ、

彼の欲情をかき立てるんだ！

.....

彼は貴女に近づくだらう。

そしたら、彼が貴女に乗りかかれるように、服を脱ぐんだ！

彼の色情を呼びさます――

これが女の役目だぞ！

服それ自身も女のからだに密着して女の色気（エロティシズム）を発生させていた。その服を脱ぐことは、人間の強烈な「エロス」を発生させた。――野獣のようなエンキドゥも、この脱衣の素肌の美しさには我を忘れた。

一週間の後、エンキドゥは快楽より目覚めて、ついにギルガメシュ王と対決しようと出立する。――しかし、英雄と豪勇とは、男と男の意気が相通じて、二人はお互いに信頼し合う友となる。二人は共に戦場に赴いて、ついに戦勝を得て凱旋する。

ギルガメシュ王は「よろいを脱ぎ、白い服を着、王冠をかぶる」。

\*

旧約聖書をはじめとして、各文明の古い文書には「服」の記述がほとんど見当たらない。ここに珍らしく記載されているギルガメシュ王の着た「白い服」は亜麻製だったようだが、当時の服は、詩の中の尼の衣服からも想像されるように、その仕立て方は、人間のからだを十分に被うだけではなくて、人間の肉体を巧みに隠しつつも、ほんのりとその線と凹凸をあらわにする、という機能を発揮しはじめていたことがわかる。――そういう機能をもつためには、人間のからだを被う布は、織物として薄く滑らかに、つまり極めて精緻であったことと思われる。

\*

たとえば、紀元前三〇〇〇年前後と推定されるメソポタミアのスーサ地方のネクロポリスの遺跡から発掘された「布」は、葬祭具の一つとして斧を包んだまま墓の中に置かれていたもので、現在はすっかり酸化してしまつて金属化してはいるけれども、よく調べてみると、その糸やその織り方は、現在のテールクロスやナプキンなどに似ていて、現代最上級の織物に近い精巧さである。タテ糸とヨコ糸に短線紡績された亜麻が手織りされていて、織物の専門家でさえ、現代のキカイを以つてしてもこの五〇〇〇年前のオリモノを凌駕できない、と驚嘆している。(註10)。——それは、タテ糸に錘(オモリ)をつけて垂らした機(はた)の上で、梳櫛(Comb)なしで織られたものである。

精巧な織物の技術は、紀元前三〇〇〇年頃には既に開発されていたのである。

\*

紀元前一六〇〇年ごろのエジプト第十八王朝の布地の遺物が発見されたが、その布地の比率は、

タテ 一三八 × ヨコ 四〇

タテ 一二八 × ヨコ 五六

というもので、タテ糸のほうがヨコ糸よりも密なことを示している。そして、この密度が、当時のエジプト人の限界でもなかったようである。

(註11)。彼等はこれよりも更に緻密な布地を織る能力を持っていた、という。これを織る道具と言えば、「むしろ」や粗い敷物を織るのと同じような、ただ天然の木材で作った水平の枠だけの、極めて素朴な織機

(はた)にすぎなかった。附属品として、深と浅の二種の溝のある櫛(コム) comb. か、円筒状の木片があるだけで、この櫛(コム)の溝は偶数と奇数の糸の列を交互に引き出したり、奥にひっこめたりして、扨(ひ)の通りをよくするためにあった。——こんな素朴な道具で、現代でもおどろくほどの、滑らかでしなやかな布を、手先きひとつで織り出した古代人の知恵と情熱とに、学者たちは驚き脱帽する。

##### 五、古代ギリシャで「羊毛」の手織り

古代エジプトでは、衣類に羊毛はほとんど使われていなかった。しかし、羊毛が全くないわけではないが、紀元前五世紀後半のギリシャの歴史家ヘロドトスがエジプトを探訪した報告によると、「寺院や墳墓(つまり僧侶や葬礼)では羊毛の使用は禁止されていた」ため、公式の場では羊毛は使用されなかった。しかし、それ以外の一般の場所では、羊毛の肩掛けなどが使われていたのである。しかし、その使用量は極めて少なかった。

エジプトでは、このすばらしく快適な羊毛はほとんど使われず、その代わりに、亜麻や木綿が主として使われていた。——このエジプトにくらべて、風土や地理的条件がはるかに羊の飼養や羊毛の着用に適していた古代ギリシャの国の人々は、織物の素材として主に羊毛を使った。三〇〇〇年以上も昔の話である。

\*

古代ギリシャ人は、自分たちの身の廻りにいる数多くの羊から、そ

の豊かな羊毛を剪り採り、それを糸に紡いで、紡いだ糸を組み合わせて各人が各自の家庭の中でゆっくりと「織物」に手織りつづけていた。羊を飼うことと、羊毛から布に織り上げることが、古代ギリシャ人アカシア人の日常生活にとって大きな生活の一部をなしていた。

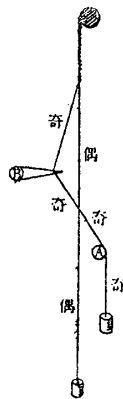
ギリシャには当時、亜麻は少量しか栽培されていなかったため、亜麻はほとんどエジプトから輸入されていたし、絹という素材は当時はまだ知られては居なかった。又、木綿は、紀元前四世紀後半（BC 327—323年）にアレキサンダー大王がこの地を征服するまで、ギリシャ本土には到来していなかった。

\*

当時のギリシャ人（正確にはアカシア人）にとって、織る作業は素朴な手工業の段階にあった。——織る前に各自で糸を紡がなければならぬ。彼等にとって、紡ぎのための道具といえば、紡錘 'spindle' が唯一の道具なのであった。そして、紡いだ羊毛を織りものに仕上げる機織り道具といえば、ギリシャに先行するメソポタミアなどの東方文明がもっていた機織り道具にほんのちよつと改良を加えた程度のものであって、依然として、天然の木から作り出された木枠で組み立てられた、極めて素朴なものだった。——四世紀ポエティア地方のカピリオン Cabrion 出土の瓶の上に描かれている絵の中にも、この素朴な「機（はた）」 'loom' と、それを織る男女を描いた絵柄のものが二点ある。——これらの絵や他の多くの考証を基にして、古代ギリシャ人の「機織り」の状況が推定できる。

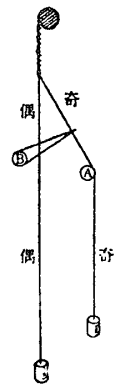
二本の柱が立つ。柱の上に横木を置く。横木は二本の柱で支えられる。横木には数十本の糸が吊り下げられる。糸は垂直に垂れる。——つまり、この糸がタテ糸である。タテ糸は、それぞれの末端に結びつけられた錘（おもり）の重さでピンと真直ぐに（垂直に）伸びる。タテ糸一本に錘（おもり）をつける代わりに、数本ずつを束にしてその末端に一つ錘（おもり）をつけてピンと伸ばす場合もある。

タテ糸の奇数番号のものと偶数番号のものを分けて、前後にひらきその間に、自由に動く横木④を差し込む。タテ糸を数本ずつまとめて、



束と束とをやはり奇数は奇数、偶数は偶数で前後に分けて、その間に横木を差し込むこともある。

この横木④の上方に、もう一本、横木⑤が自由に動くように置かれ、この横木⑤に、奇数番号の糸がすべてひっかけられるように細工され、この横木⑤を前にひっぱると、奇数番号の糸だけが偶数番号の糸と糸との間から前に出て来て、再び横木⑤をゆるめると、奇数の糸は偶数の糸の間を通り抜けて後方（奥）に引っ込む仕掛けになっている。（図解参照）



未だ単なる平たい木製の針だが、それでも杼(ひ) 'shuttle' と名付けられるものにはちがいない——この杼(ひ)が、タテ糸を構成する二つの群(奇数群と偶数群)との間にできた開口部の中を横に走って、ヨコ糸をヨコに通し、開口部が閉じると、ヨコ糸の中に織りこまれることとなる。——こうして、大きな木杵きねに組みこまれた織機(はた)の上辺から徐々に下辺に向かって「織り」が進められてゆく。

そして、ヨコ糸がタテ糸の中に織りこまれる度毎に、単純な歯がついただけの櫛(コム) 'comb' が織りこまれたヨコ糸を上辺にしっかりと押し込み抑えつける。——こうして織りつづけて行っても、上辺の横木も固定したままだから、織り上がった布の長さは、この織機(はた)の高さいっぱいが限度であった(註11)

大変手間のかかる仕事である。——当時の人たちは長い時間をかけてのんびりと仕事をした。生活に必要な品々は、大抵家庭の中で作られ、家族の全員が何らかの手仕事をした。オデュッセウスのような地方の王の邸の中でさえも、自分の家のための布やベッドや椅子や靴までも自分たちの手で作った。——オデュッセウスが冒険の旅に出たあと、二十年の間その留守を守った美貌の妻ペーネロペイアも、ほかの美女と同じよう

に、召使いたちといっしょに糸を紡ぎ布を織り刺繍をし、そしてその他の家事をして忙しく働いていた。

糸を紡ぐことは、大層時間のかかることである。英語で「糸を紡ぐ」ことを 'spin a yarn' というが、この熟語は「延々と時間がかかって果てしがない」という意味となって諺ことわざのように日常使われている。——紡ぎ織ることは、本来大変手間と暇のかかるものであった。それだけに羊毛の織り物は貴重であった。

\*

紀元前一〇〇〇年以前のギリシヤ人を描いたホメロスの長篇叙事詩『オデュッセイア』は、英雄オデュッセウス王の帰還を前にして、貞淑にして聡明美貌の妻ペーネロペイアが毎日羊毛を紡ぎ機を織っては時間をかせぎ、多数の求婚者の申し出をさり気なくかわして返事を長びかしている情景にも一つの焦点があてられている。

十数年に及ぶ長い冒険の旅から帰還した夫オデュッセウスを、その余りにも変り果てた姿に、まだそれが自分の夫その人だとは気づかないで貞淑の妻ペーネロペイアは、その客人(実は夫)に自分の苦衷くちゆうを打ち明ける。

「よそのお人、夫のオデュッセウスが船出して出かけてしまったあと、神は数々の不幸をわたくしにお寄せされました。島々の長おたちやこの都の首領たちみんなが、いやがる私に求婚し、この家を食たいつぶしています。そのために私は、客人をも保護を求め人をも公おけの布告使おをも心にとめず、ひたすら夫オデュッセウスを恋おいがれて心をすり減

らしているのです。求婚者たちは結婚を急いでいますが、わたくしのほうは計略をめぐらせています。

まず、どなたか神様がわたくしに、大きな織機（はた）を広間に据え、細糸を紡ぎ、それですべても広い幅の袍を織ることを思いつかせて下さいました。それで、すぐにあの人たちに申しました――

『求婚者の若い殿方、オデュッセウスはもうこの世にないのですからこの布を織り終えるまで、お急ぎではあろうけれど、わたくしの結婚を待つて下さいませ。夫の父上ラーエルテース殿のこの棺衣（しかばねぎ）かたびら）のための織物が無駄になりませんように。莫大な財を勝ち得たお人が棺衣もなしに寝かされて、この地アカイアの女たちが私を悪く言いませんように』と、こう言うと、彼等の雄々しい心はそれに従いました。

そこで、わたくしは、昼間はその大きな織機を織り、夜には松明をそばに置かせて、その織り物を解いていました。……こうして三年の間この策略は見破られずに、アカイア人をだましていました。四年目が来て、四季が経めぐり、月が欠け、数多くの日が過ぎた時に、その時に恥知らずの牝犬の婢女の内通で、彼等は現場を襲って私を押え、大声で非難しました。――こうして私はいいやながら、止むなくそれを仕上げました。……もう今は結婚を逃れることもできず、ほかの策略もございませぬ。両親は、結婚せよ、と熱心にすすめますし……」

（高津春繁氏訳）

貞淑の妻ペーネロペイアが切羽詰ったとき、夫オデュッセウスは自分

の身分を妻に明かそうとする。夫であることを立証するものは、実は、夫が発する日に妻が夫に着せかけた最上質の羊毛（ウール）のマントと、輝く肌着なのであった。

「尊いオデュッセウスは二つ折りの紫の厚いマントを羽織っていた。衣のブローチは黄金で、ピンの留め金は二重になり、その表面には巧みな犬と仔鹿の彫りがあった。それから、彼が身につけている、乾いた玉ねぎの皮のように輝いている下着に気がついた。それほどそれはやわらかで、太陽のように輝かしかつた。多くの女たちはそれを見て驚嘆した」

ペーネロペイアは、オデュッセウスが述べた間違いのない証拠を認めて、心ゆくまで涙を流した。ペーネロペイアは答える……

「……あなたのおっしゃる着物は、このわたくしが自分で倉から取り出して、たたんで夫に与え、その飾りに、と、輝くブローチをつけました」（高津春繁氏訳）

古代ギリシャ人は、手織りした羊毛製の四角い織物の布を、裁断したり縫ったりすることはなく、そのままを肩で重ねて衣裳としたのである。女性は肩から膝までの四角い布を腰のところ帯紐でとめて、からだの曲線をこの薄い布地で透けるように被った。――ギリシャの瓶（レキトス）の絵や彫刻などに数多く見られる通りである。

夫のゼウス大神の浮気に怒った女神ヘーレーが、浮気相手のニンフェ



(精) たちに負けるものか、と化粧をこらし薄物の衣を身にまとして大神ゼウスの許に誘惑に出かけてゆく様子が、同じホメロスの大叙事詩『イーリアス』の第十四巻に生き生きと描写されている。

「……女神は、かぐわしいアンブロシア(仙香)でお肌を拭われ……御体には、かぐわしい着衣を被られた。それはなめらかに仕上げられたもので、そのあでやかさは輝くばかり。そのうえに女神は、すっぼりと真新らしくきれいな衣をお召しになった。その真っ白さは日の光のよう」

——その姿はまことに艶美にみちてエロティックだったようである。一目見て、大神ゼウスは燃えて、忽ち腕の中にお妃を抱き取られると、その足許の大地は嫩草を萌え出し、露を含んだやさしい花々を隙間なく高く生え出させ咲き乱れさせた。二人が臥床に身を横たえると、二人の上には美しい黄金色の雲がかぶさり、きらめく露がしきりと降りそそいだ。(351行)

羊毛の極めて細く滑らかに織り上げられた真白い薄布が、女神をいやが上にも女らしく美しく見せる効用を果たしたのである。

\*

ペーネロペイアが織って夫に着せた肌着や、求婚者たちをしりぞけるために織りつづけた布は、最高に細く滑らかな糸で織り上げられた、まことにつややかで輝やかしいものであった。——イギリスの 'Everyman's Library' におさめられている "Homer's Odyssey" (つまり、ホメロスのオデュッセイア) の英訳本を見てみよう。

"And I mark'd also the smooth bright shirt that he wore,

In smoothness and sheen like a dried onion-skin,

So sleek did it show,……"

(そのシャツの滑らかさと絹のような艶やかな輝きは、

太陽の輝きのように輝いた)

——この英訳本では、その輝きを sleek という形容詞で表現している。

それは、夕陽の丘に輝く羊の群れの体毛の輝き——つまり羊毛(ウール)のもつ、優しく滑らかで気品のある光沢のことなのである。極めて細く紡がれた羊毛の糸の技術もすばらしいが、とにかく、羊毛 (wool) 自身のもつ肌ざわりと着ごちの快よさと輝きと長持ちと高貴さと…… etc etc……ギリシャの詩聖は、羊毛の質感を、以上二つのドラマの中に実に見事に謳い上げていて、その見事さが果たす役割さえ叙述つくしていて、余すところがない。——さすがである。

\*

ローマの国立美術館に『ルトヴィシの玉座』と名づけられた大理石彫刻がある。高さ一メートルの台座の正面には「ヴィナスの誕生」と呼ばれている浮彫りが施されている。——清らかな容姿をしたヴィナスは、肌に密着した薄衣に乳房のふくらみから臍の凹凸までもあらわにして上半身を海面から浮かび上らせ、左右の二人のニンフェに助けられて、いまでも海上に立ち上ろうとしている。足首までとどく柔らかな襪の薄物をまとうている二人のニンフェや、ヴィナスの下半身を被いながらそれで救い上げようと手にしている厚手の布などの質感描写に対して、このウ

イナスの豊かな肌を被う薄物のしなやかな描写は、また何と一段と流麗な優雅さなのであろう！

これは、紀元前五世紀前半の古代ギリシャ、イオニア芸術の中の逸品なのであるが、人体表現の古拙さや素朴さにもかかわらず、この布地の質感表現のすばらしさには目を見張るものがある。——このしなやかで軽ろやかな布地が、実は羊毛で織られたのだと知って、私は改めて羊毛布地への驚嘆と讚美に胸の中が沸き立ち騒ぐのを禁じ得なかった。

\*

ホメロスに謳われた羊毛を織る精巧な手仕事は、決して神話の中の作りごとではなかったのだ。——ギリシャ、アカイア文明に先行するクレタ文明の中でも、クレタの女たちは、自分たちの家の中で羊毛を紡ぎ服地を織り、腰をきつくコルセットでしめつけ、下半身はカラフルな長いスカートを豊かに被っていたのに、なんと雨の乳房と肩とはむき出しのまま、強い白日の中にあらわにしていたのだ。——クレタ島のヘラクレイオン美術館所蔵の『蛇を持つ女神』像（紀元前十七世紀）は、真正面を向いてスラリと直立し、雨の丸やかな白い乳房だけをあらわにしてその際立った目鼻立ちを更に強く引き立てている。——また、クノッソス宮殿の壁画の破片に『パリジェンヌ』（紀元前十六世紀）と名付けられている美貌の女性のフレスコ画があるが、青黒く大きな眸が抜けるように白い肌の上にくっきりと鮮かに描かれており、豊か過ぎるほどふくらんだ胸部を被う薄物は、この女性の肌の白さや清らかさを巧みに表現している、現代のバリの女性か、と錯覚させるほど、シックな女らしさを

強調しているのである。

ところで、このクレタの白日の下にあらわにされた雨の乳房は、若い女性ならともかくとして、老醜の女たちだったら、それはまことに目にも痛ましいものだったのではなからうか？……などと余計な想像さえ起こさせる。——しかし幸いなことに、考古学や歴史学の史料は、クレタの女が胸を被う場合は、透明な肌着をつけることがきまりだったことを教えてくれている。——しかも、その透明な薄物が、羊毛の細かい糸でそんな昔の時に織られていたことを知って、再び私は感無量の想いに充たされるのである。

\*

細い糸を紡ぎ出すことと、精密な織物を織り出すこととは、文明にとって、また人間にとって、大事な課題であり、努力精進の目標でもあったのだろう。エジプトの遺品を見ても判る。

\*

ギリシャ時代の有名な劇作家アリストファネス（BC 445—385）の喜劇に『リジストラータ（女の平和）』という傑作がある。——家庭を長く離れて戦争に引きずりまわされている男たちに、戦争をやめさせて平和を取り戻そうと、ギリシャとスパルタの女たちが、リジストラータの唱導によって団結して城内に立てこもり、夫婦間の性行為を拒否してついに男性陣に戦争中止の和解をもたらす、という七幕のエロティックで痛快な劇なのだが、この劇の中で、主人公リジストラータという女性

「家庭の中でちんまりと坐っていて、羊毛や糸をくしけずりながら、豆などムシャムシャ頬張っていれば、女としてお似合いなんでしょうよッ！」

と、政治意識のない女どもを痛烈に皮肉る。それでも家庭婦人たちは、「ミレトス製の羊毛をほったらかしにしておいたから虫に喰われてしまっているかもしれない……家に行かなければならないわア、早くしないと、私の羊毛はもう使えなくなってしまう……」

と、大事な羊毛のことを気にして落ち着かない。「粗末な麻の織物」などはどうでもいい、羊毛製の敷物が留守の間に牡鶏どもにつつかれてボロになったしまったことで気が気でない。——そんなことは「汚れた羊毛をきれいに洗う時に用捨もなく街に捨てる小汚ない脂のように」さっぱりと捨て去って、まず、男から離れて男をじらすのよ——と、リジストラータは煽動する。

「サフラン色のガウンやら、陽に透き通る肌着をつけて」裸の肌をチラとさせて、それを男に見せて男たちを欲情させ悶絶させろ！と戦術を説くのだ。

\*

男を悶絶させる薄物の肌着が、古代ギリシャでは「女の武器」だった。古典主義時代からヘレニスティック時代にかけて(BC 450—BC 30)数多く彫り上げられた女神像・ヴィナス像の多くが、裸体であるより、もっと艶美に、薄い布地の下に素肌の曲線を強調しているのを見ると、この羊毛という材質が、どんなに軽ろやかに、そして、しなやかに愛用

され尊敬されていたかが解る。——それは又、極めて精巧で繊細だったからこそ、着るに快よく愉しかったものなのであろう。羊毛のすばらしさ、優秀さが、ギリシャの昔、ヴィナス像に、また文学に、何気なく語られていることに注目したい。

#### 補説 田園詩と牧羊詩 (Pastoral)

古代ギリシャ人は、各自の家庭内で 'at home' 手織りした home-spun 羊毛の四角い布を、裁断も縫合することもなく、ただそのまま素肌にもといつけて、ヴィナスの彫刻像や瓶絵などに見るような流麗で繊細な衣服の曲線美を自分のからだにそって打ち出した。家庭内での手織りだから at home 「アットホーム」な親近感をもっていたことだろう。

——どの絵柄を見ても、羊毛の衣は軽やかそうで、なめらかに身にまといついていて、しかも、べとつかない。それは、「さわやか」でさえあるのだ。上質の、そして家庭内で念入りに作られた羊毛の布地の優雅さなのであろう。

それに対して、古くから日本人は、ギリシャ人と同じように四角い布地をただ四角に裁断し、それを四角い面の連続でつぎ合わせた服を作る伝統をもっていたが、この四角の布地は、麻や絹や木綿であったため四角を四角のまま身につけて、からだの曲線を押し隠して外見を四角や三角の形に着こなし、更に直線的にからだを動かした。——それが日本的動作の美学であり礼法でもあった。

\*

次に、風土から考えて見よう。ギリシャでは、強烈で明かるすぎる位の太陽と乾いた大気とがあり、冬季のきびしい寒さになっても、保温や風通しによい羊毛の布地が、快よくギリシャ人の肌を迎え入れられたのであろう。

それに反して、多湿で季節の移ろいのはげしい日本の風土では、衣服を素肌に密着させることを避けるような「生活の知恵」が生まれた。素材としても、獣毛は汚らわしい、と云って忌み嫌われて使われなかったし、又羊などの家畜が繁殖しにくい風土でもあった。当然の結果として、衣類は主として植物性セニイから作られた。——牧場と田圃との違いである。

\*

都会ではなく、又海洋や港湾でもなく山岳でもない、広がりのある鄙びた「いなか」の趣きを、「田園生活」とか田園的などと表現するが、実はここに大きな陥し穴がある。——西欧のひなびた「いなか」の趣きは「pastoral」「パストラル」というが、これをいきなり「田園的」と翻訳してしまうと、日本人はこの「田園」の文字の中に、広々とした水田や鎮守の森や春の小川や菜の花畠などの情景を綴り合わせてしまった。「田園」の字に当たるイメージはほとんど浮かび上らせもしないし、また当然、遠く西欧の野原に想いを致すこともしない。

『田園交響曲』“Sinfonia Pastorale”と名付けられた『交響曲第六番へ長調68』を聞いても、日本人の胸中に浮ぶ情景は「兎追ひし彼の山、小鮎釣りし彼の川」からほとんど一歩も足を踏み出せない。——だ

から、ウォルト・ディズニイがこの交響曲を見事なアニメーションの映像に置き換えて、楽趣に合わせて情景を西欧風に展開させたとき（ディズニイの『ファンタジア』）、日本の観客のほとんどは、自分が勝手に想定していた「田園」風景とあまりに食いちがっていたので、強い衝撃とはげしい戸迷いを感じてしまったのである。

\*

実は、西欧語の「PASTORAL」（パストラル）は、牧場、放牧場（英語の pasture）の形容詞であって、牧畜に適する広々とした高燥の草原の感覚を指しているのであり、農耕地の水っぼい平地の感覚とは全く異質なものである。——牧羊神が躍り、ニンフェが舞い、羊の群れが輝く高燥の牧草地であり、白い岩肌を見せる厳しい風土でもあるのだ。いうなれば、極めてギリシャ的情景なのである。だから「田園的」と翻訳するよりも「牧羊的」「牧場的」と訳した方が誤りが少ないはずである。——その「pastoral land」や「pastoral life」には、都会や海洋には見出せない、一種独特の、のどかな鄙びた詩があるわけである。

\*

また、牧羊の生活者や牧羊地には、澄んだ大気の中をわたって、ひびき、歌われる「ひなびた」「pastoral」歌声が古くから流れていた。その牧羊者たちの歌う「牧歌」を文学的な薫り高い芸術史にまで高めて謳い上げたはじめての詩人は、ギリシャ、ヘレニスティク時代第一の詩聖テオクリトスである。

\*

このテオクリトスより数世紀も前の紀元前七世紀末に生れた情熱の女流詩人サップオも

「ヒアシンサスの山を行く牛飼いの足に踏みしだかれて……」

と牧畜をうたい、

「夕星は かがやく朝が八方に散らしたものを

みな もとへ つれかへす

羊をかへし 山羊をかへし

母の手に 子をつれかへす」(呉茂一氏訳)

と美しい風景を心にしみ入る叙情で綴り、

「……………」

いづみのほとり

キオスづくりの裳をかかげもち

沐浴したまへ

……………」(呉茂一氏訳)

と牧場の中の清らかな姿を詠じている。

\*

Idyllとか Epyllion とか——言うなれば「牧景詩」とでもいうものを創案したテオクリストの『ヘレンの婚礼歌』の一節を見てみよう。

「……………」

またこれほども見事なしな(篠?)を

籠の中から 糸巻に繰りとる女は

また精巧な機にかかつて

梭を手に織りあはすにも

ひろい棧からおろす裂地の

これほども てぢやうぶな女の人は

いえ まったくのこと

……………」

人みなが眼に憧がれの思ひを寄せるヘレナアのほかに

またとあるまい」(呉茂一氏訳)

剪りとられ洗われた羊毛の篠(しの)を紡ぎ出すところから、見事な布地に織り上げるまでの女の手仕事の段取りを、かくも軽ろやかに、しかも適確に描写しつくして、且つ詩情を豊かにみなぎらせているのが、これが実は pastoral 又は pastoral poem (田園詩) の本家本元の真髄なのである。

——これは、普通の英和辞典にあるような「田園詩」などという訳語よりも、羊毛従事者礼讃や羊毛礼讃であるのだから、むしろ「羊毛の詩」とでもいうものではないだろうか?——私はこの「pastoral」を「牧羊詩」と訳したほうがいいと思っている。

\*

(参考文献)

## 第二篇・毛織物の文化

(註1) André Le-roi Gouham : "The Primitive Societies"

James Lauer : "The Concise History of Costume and Fashion" ほか

(註2) Canton Thompson and Gardner : "The Desert Fayum"

(註3) Beni-Hassen : "Thebe"

(註4) André-Leroi-Gourham : "Primitive Societies"

(註5) G.Child 著「文明の起源」など

(註6・8) 例、イリン著「人間の歴史」など

(註7・12) Georges Goyan : "Egyptian Antiquity"

(註9) James Lauer : "The Concise History of Costume and Fashion"

(註10) Georges Contenau の著作等参照

(註11) Jean Deshayes : "Greek technology" ほか参照

第一章 イエス・キリストの時代

第二章 ローマ時代の衣服

第三章 ギリシャ神話の牧歌的情景

第四章 中世一〇〇〇年間の空白

第五章 羊毛文化の基盤Ⅱ女の糸紡ぎ

第六章 貴重なテイルスの紫染め

第七章 染色の起源

第八章 中世の染めの色(赤・青・黄)

第九章 中世の染色秘法

第十章 染色職人のギルド(組合) 結成

### 一、イエス・キリストの時代

西欧文明の源泉地は地中海ぞいに広がる地域であった。地中海の南に位置する北エジプトから東上して、シリア、メソポタミアを経て、時計廻りとは逆方向に、ギリシャからイタリア半島に至る。紀元前一〇〇〇年ごろから、シリアの地にもギリシャの地にも「牧羊」は定着して、羊毛は人間生活に密着しはじめた。

パレスチナ出土の『糸を紡ぐ女』と題される石の浮彫彫刻(ループブル美術館蔵)は、紀元前一〇〇〇年頃のものだと推定されているが、シリア地方に紡織が、素朴だが盛んに始まっていたことを雄弁に語っている。

——紀元前一〇〇〇年といえ、一介の牧羊者から身を起こして英雄となったダビテ王の時代であり、その子ソロモンがイスラエルを統一して栄華を誇った時代でもある。

しかし、イスラエルは、ソロモン王の没後、たちまち王国としては分裂して、周辺の諸民族に侵入され支配されつづけて、再び往年の「ソロモンの栄華」の時代は帰っては来なかつた。——イスラエルの人々は、一〇〇〇年の間、自分の民族、自分の国、ひいては世界の人々を、そのさすらいと塗炭の苦しみから救ってくれる「メシア」(救世主)の来臨を、心の奥底深く、強くはげしく待ち望むようになっていった。

紀元〇年(歴史的に正確に言えば紀元後四年)に、ヤーヴェの神の独り子イエスがダビデの地に降誕した。メシア messiah の来臨である。ヘブライ語の「メシア」をギリシャ語では *Xristos* クリストス(英語で Christ)「キリスト」と言った。——人間イエスが「キリスト」となって世界の歴史は書き改められ、新しい紀元がはじまるのだが、このイエス・キリストの存在は、紀元前の、ヤーヴェの神と人間との間の、一対一のきびしい契約、Covenant 又は Testament の代わりに、キリスト自身が人間すべての罪業を背負って自らを犠牲として、怒れる神に贖(あがな)い取りなすことで、神と、神の子キリストと、人間との、この三者で結ばれる「新しい契約」New Covenant 又は New Testament を作り出した。「新しい契約」を記した本「The Book」が『新約聖書』「The Book of New Testament」である。

ヤーヴェの神は、自分の独り息子を犠牲として自分に捧げさせるほど

に罪深い人類を愛した、と神学的には解釈されるのであるが、この犠牲を、イスラエルの人々は「神の小羊」the Lamb と表現した。

牧羊者にとって、羊群を大切に養い守り殖やし貯えておくことが、健全な生活を保持してゆくための最低必要条件だった。羊の貯蔵は、民族全員に課せられた義務であり、それが神の意志にかなうことだ、と信ぜられていた。つまり、羊の貯蔵は神意であった。——英語で貯蔵を意味する「provision」という言葉が、同時に「神意」の語義を持っているということは、このイスラエルの宗教(ユダヤ教→キリスト教)的世界観に基くのである。

イスラエルの人々、そして特にイエス・キリストにとって、羊は他のすべての動物にまさって重要視された。自らも「神の小羊」と唱えていたイエスは、自分が十字架の上に神への犠牲として屠られる直前、この世の終りの最後の審判について弟子たちに語った。そのとき、イエスは、義しき者を羊にたとえ、悪しき人を山羊にたとえて、羊を右の位に置いた。

「人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたるとき、その栄光の座位に坐せん。かくて、その前にもろもろの国人あつめられん。これを別つこと牧羊者が羊と山羊を別つ如くして、羊をその右に、山羊をその左におかん。ここに王その右におる者どもに言わん『わが父に祝せられたる者よ、来たりて世の創めより汝らのために備えられたる国を嗣げ。……』(マタイ伝25章31——)

\*

羊は、ただしいもの、愛されるものであった。——何故なら、羊は美しく清らかで温順で無邪気だと考えられたからであり、それにもまして人間の生活に欠くことのできない羊毛提供の役割を果たしていたからである。だから、たとえ一頭でも羊が迷子になったら、他の九十九頭を置いてきぼりにしても、牧羊者はその「迷い羊」"a stray sheep"を何日もかかって探しまわり、その一頭を見つけ出したときには、他の九十九頭がひがむほど、その一頭をいとおしむのだ、とイエスは罪の救済の比喩に語ったのだ。 (ルカ伝18章12—)

罪ある人を救うためにこの世に生れて来たのだ、とイエスは自らを屢々「善き牧者」"Good Shepherd" 又は "the good shepherd" に喩えた。——中世からルネッサンスにかけて、実に数多くの「善き牧者」の絵画や彫刻が教会堂美術として描かれ彫まれつづけて数多くの作品が残されている。例えば、イタリア、ラヴェンナのガルラ・プランディア廟堂の天井モザイク壁画の『善き牧者』の絵などは、中世の素朴な手法でありながら、全体の調子はうらかな牧歌性をただよわせていて、まさにギリシヤ的風土の表現である。ここには、イスラエルの厳しい風土の中に培われていった一神教の、神とキリストと人間との「契約の確認」(英語で farm) という神学があるのと同時に、牧羊地が farm と表現されるよりも pasture と言いつく現わした方がピッタリするギリシヤ的牧羊の風土と感覚とが併存して盛りこまれているようである。

西欧の文化は、ギリシヤ文化の風土の上にキリスト教世界観が交りながら育っていったものと考えられる。いずれも牧羊と牧地の共通の基盤

をもっていた。——およそ東洋の風土とは異質であった。我々は羊と羊毛を除外視しては西欧の文化を考察することは出来ないのである。

しかし、イエス・キリストの時代と生活に関しては、あれほど目も眩むほど膨大な研究資料が壘積されている割には、我々は身近かにその研究報告の資料を与えられていない。多くの研究は、その教理や歴史的意義に指向しすぎて、人間イエスが身にまとうていた衣服などに関しては伝えることが極めて少ないのだ。しかし、勿論、羊の風土の真只中に生れ育ったのだから、そして、古代ギリシヤに完成された見事な紡織の技術と普及を受けついでいたのであるから、イエスたちは当然しつかりした羊毛の毛織物を身につけていたことになる。——日常極く当り前のもの、やことは、歴史的記録には、全く、といていいほど残らないものである。一般生活の中に滲透しつくしていれば、今日現在の新聞紙上にも「誰々はウールの服を着ていた」などとは一字も記されないのと同様である。

二〇〇〇年前のイエスの時代、羊毛製の衣服は日常当然のことなのでから、福音書には記録されていない。——それとは逆に、羊毛製でない服が注目されている。——イエスが十字架を背負って処刑場に赴くとき、「亜麻布 (a linen cloth) を纏った一人の若者」がイエスに従った (マルコ伝14章51) と珍らしそうに記録されているし、イエスが埋葬されるときには「上質の麻布 (fine linen) にくるんだ」 (マルコ伝15章46ほか) と、各福音書記者は筆を揃えて記録している。

そして、特にヨハネス伝福音書の記者は、イエスが死の際、身にまと



っていた上衣と下衣がすばらしく上質のものであったことを際立たせて伝えていく。(ヨハネ伝19章23・24)。

「兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣(garments)をとりて四つに分け、各々その一つを得たり。また下衣(the coat)を取りしが下衣(coat)は縫目なく、上よりすべて織りたる物なれば」兵卒どもは……くじ引きで分けたり」。

イエスの着ておられた縫い目なしのすばらしい衣が、その後どうなったか——西欧にある「聖衣」に関する伝説が、その衣の貴重価値を語っている。——紀元前二世紀に新種の羊が西欧に飼育され始めて、まだ全地域一般には普及しなかった時である。少し厚手の羊毛の織物ではあつたらうが、ある程度、精巧な「わざ」で成し遂げられていた羊毛(ウール)の織物——それが機械化され工業化される為には、以後一〇〇〇年以上の歳月を必要とする。

とにかく、紀元〇年前後のころまでには、羊は西欧文明の風土に密着していたし、同時に羊毛の織物も東方と西欧文化に定着していたことは明確なことである。

## 二、ローマ時代の衣服

しかし、紀元前までの、あの活発な発明や開発や改良や愛好や尊敬はキリスト紀元以後ピタリと影をひそめて失なわれてしまい、地中海を中心とする当時の世界(西欧)は、紀元前そのままの様式や方法で、羊を、羊毛を、糸を、布を、生活の中に取り入れて、一〇〇〇年もの長い間同

じように利用し続けていたのである。一千年の間、ほとんど同じ様式で羊が飼われ毛が剪られ毛が洗われ糸に紡がれ手で織られ、極く稀れには染められ、そして簡単な衣服に仕立て上げられ、身に着けられる——こういう日常生活文化の同じような繰り返しが続いた、ということを考えるると、人間の生活の営み方というものは、文字通り「一朝一夕」には易えられない「千年不易」の陋固とした習慣性や墮性があるものだということが判る。のびやかで悠久な習俗である。

その極く当り前の日常の世界の中では、際立って物珍らしく目新しい物と「こと」だけが記録や文字に残る。例を挙げて言えば、その稀少で貴い物に「絹」がある。紀元二世紀末ごろには絹は随分と普及していたらしいが、それでも尚極めて高価なものだったようで、「絹」の記述は、ルネッサンス期に至るまで、ローマ期の詩歌や中世の騎士物語や社会生活の記録などに数多くちりばめられており、我々が究明しようとする「羊毛」の記述などは、全く、といってよいほど発見することが出来ない。羊毛の文化史に取り組む我々にとっては、ローマ時代以後中世末期までの一〇〇〇年間という空間は「空白」blank 又は「暗黒」black の時代とも言える時代なのである。口惜しいことである。

しかし、これは、羊毛の文化にとつては逆に、大層よろこばしい現象だ、と考えることも出来るのである。——それは、もう何の記述も必要としないほど、つまり空気や水と同じように、羊毛は人間にとつてあまりにも日常茶飯事(当り前すぎる)のものになってしまっていた、という証拠であるからである。

イエス・キリストを処刑したローマの兵士たちや上官たちは、昔のローマ帝国の風習のままの衣服を身に着けていたにちがいない。ローマ建国以来、紀元後三九五年ローマ帝国崩壊の時まで約一〇〇〇年近く、ローマ文化圏にある人々は、古代ギリシヤ人の衣服様式を受けついで、羊毛のものを単純に身に著けていた。上衣を「トーガ」*toga* と言い、下着は「チュニック」または「テュニカ」*tunic(a)* といって、いずれも羊毛の毛織り物である。日本のキモノと同じように、基本の材質様式（モード）は延々と千年にわたって殆ど変るところはなかったのである。また階層の区別もなく着用されていたのだった。

女性の服装は古代人の四角い布をまるやかに身にまといつける方式を受けついで。古代ギリシヤと異なる点は、胸の下を腰帯で結んで、鬘の衣は足許まで垂らしたことである。これをストラ *stola* と呼んだ。外出の際はこの上に長い外套「パラ」*palla* を羽織った。

男性の室内着は質素な羊毛製のシャツ（テュニカ *tunica*）であり寝室着としても使われていた。そして外出のときには、この上に上衣「トーガ」*toga* をまとった。更に外套をつけることもあった。寒い時には

「トーガ」*toga* の下に「テュニカ」*tunica* を何枚も着込んだ。

「いまはもう晩秋だ、

それなのに君は、暖い毛の合羽も下着も

家には持ち合わせず……」（シドンのアンティパドロス）

などという詩も残っている。

\*

「トーガ」*toga* には「被う」という意味がある。八・三平方メートルの、大きく一つにつづいた布であって、染色していない羊毛の毛織物である。着る人の二倍の幅と三倍の長さがあり、この大きな布で身体を被ったあと、残った布は左肩越しにうしろにまわし、ついで右腕の下を通して前に引き出し、再び左肩越しに布をまわした。胸のひだはポケットの役目を果たした。右腕は自由であった。——高位高官の役人や神官だけは、この「トーガ」*toga* の縁を紫色で縁どったもの（トーガ・プラエテクスタ *toga praetexta*）を着ていた。

\*

いまから二〇〇〇年から一八〇〇年前の、彼等の衣服の実物がそのまま現代に遺品として残っていればどんなにか心強いことだろう——考古学者も歴史学者も、何一つ実物に接することができずに、ただ、文字や絵の記録に頼って推定していただけた。心細いことだったろう。

ところが今から数年前の一九七三年の秋に、古代人の衣生活を解明する上で非常に重要な手がかりとなる毛織物の断片が、なんと、イギリスで発掘されたのである。

英国北部ノーザンバーランド州で発掘中の古代ローマ兵の駐屯地の遺跡から、紀元八〇年頃の毛織物の断片が発見された。——これは、近くにある紀元三世紀の遺跡の排水工事をしているときに偶然に見つかったもので、西ヨーロッパで発掘された毛織物では最古のものとされている。この毛織物の断片が発見された「ヴィンドランダ」*Vindolanda* と呼ばれる古代ローマの要塞地の遺跡は、約八ヘクタール（八万平方メー

トル)にも及ぶ広大なもので、全部を発掘するには六十年もかかるであらうと言われている。

これまでに発掘された五十点に及ぶ毛織物の断片については、マンチエスター大学のジョン・ワイルド博士を中心に研究が進められているが、ワイルド博士によれば、発掘された区域は、ローマ帝国の将校の住居の跡のようで、その上、五〇点の布切れはすべて羊毛(ウール)であることが判明した。そして、その大部分が、外衣か毛布の断片であろう、と推測されている。断片の中で一番大きなものはA4型の紙の大きさほどもあり、中にはボタンのついたままのものも含まれているのだ。

織り方を見してみると、平織は全く見られず、すべてがトワ三(綾織り)であって、しかも四枚綾やダイヤモンド織りといった精巧な織り方のものが多いのが注目されている。

また特に専門家の関心を呼んだのは、紫色の糸がはっきりと織りこまれた布片であった。——もし、この紫色が染料によるものだとすれば、中世染色の章で言及するが、これは稀れにみる貴重な資料である、と言わなければならない。何故なら、染料は、布地を土中に埋めた場合には通常かなり早い段階で組織が破壊されてしまうからである。——今後の技術的な説明が待たれる所である。

\*

この発掘された遺物を見ても、ローマ人は日常、羊毛の織物を着用していたことは明らかである。

この羊毛の肌着や上衣は軽やかで肌触りよく快適この上ないものだった

たようで、ローマ人はこの羊毛の織物を愛好しつづけて離さなかった。自給自足の経済状態の時代にあつては当然、羊は彼等にとって大切な家畜であつた。羊の飼育は前の時代に劣らず更に熱心に盛んに行なわれていたことは言うまでもない。そこには愛情があり詩があつた。

紀元前五五五ごろに世を去つた詩人ルクレティウスは、その詩『事物の本性について』の中で、羊の群れが「うるわしき牧場を跳ねまわり、あふれる川を飛びこえる」美しい状況を、「おお神よ！」と讃嘆しながら描写しているし、ローマを離れて鄙びた田園で心を安らげていた詩人ホラティウスは、

春は訪れ、きびしき冬は去る

舟は風ぎの海に漕ぎ出し、

羊どもは牧舎から放たれたり

と、のびやかな牧場の風景を歓喜と共に謳い上げている。紀元後一世紀に地下に埋もれてしまったポンペイの遺跡の中の壁画には、羊飼いが羊や山羊たちとたのしげに遊んでいる牧場の春が明色に彩られて描かれている。

このように舒びやかな牧羊風景は、

// 昂星ののぼる頃ほひ

春もはや過ぎがたの

いや果ての牧場に稚い羊が

草を食むころ〃 (テオクリトス)

\*

〃牛飼も尋ね来りぬ

羊飼らも山羊飼ふ友も

より集ひぬ〃

〃たのしい西風も吹く……

牧の野は花のさかり〃

(プラトオン) へ以上三篇 高津春繁氏訳

などとギリシャの詩人たちが歌った牧野の美しさと、ほとんど変わってはいない。それは千年の前の時代から少しも変わらない牧場風景であり、その後千年経た後でもやはり変らない牧場の風土なのであろう。世界最古のラウンデルという中世の音楽に「夏が来た」という曲がある。——この曲は一二四〇年ごろ作曲されたといわれている。

〃夏が来た。声高らかに歌え、カンコ鳥!

牧場には花開き、木々は芽を吹く。

森には小鳥が啼き交わす。歌え、カンコ鳥!

雄羊は子羊を追ってメエと啼き、

雄牛は子牛を追ってモオと啼く

………  
西欧文化の土壌には牧場性が長く定着している。千年も二千年も変らない。千年不易不変の風土と習俗は、じっくりと羊と羊毛を西欧文化と経済機構の中に浸透し切ってしまったのだ。我々もじっくりとこの堆積の歴史の土を掘り返えして、羊と羊毛文化とをあせらずに掘りつけて行こうと思う。

### 三、ギリシャ神話の牧歌的情景

ローマ人の先祖は農夫か羊飼いだった。ローマの風土はギリシャと同じく牧羊に適していた。だから、ギリシャの牧場に産まれた神話はそのままローマ人の神々の話として受けつがれた。広々とした牧場の緑濃い森や谷間が神話の舞台であった。商業経済の神マーキュリーは、ギリシャ神話ではヘルメスと呼ばれて、元来は牧畜の守護神であった。

オリュンポス山の麓ピエリアの野には、ゼウス大神の息子アポロンの神がいた。夜陰に乗じて、ヘルメスはアポロンが飼っていた羊五〇頭を盗み出して、途々自分の足跡を消しながらテッサリアを通りポイオチアに出て、ついに、夜の明けるまでにアルフェイオス河のほとりのピロスに帰りついた。その地で、ヘルメスは盗んできた羊のうち二頭を神に供えた。それから残りの羊全部をキレーネの山の中に隠しておいた。

朝になって羊の紛失に気がついたアポロンは、羊を探しつづけてついにキレーネの山を探し当てた。ところが、そこには、豎琴を手にしたまま眠たふりをしているヘルメスがいた。アポロンは猛然と怒ってヘルメ

スを責め立てた。ヘルメスは眠むそうな眼をこすりながらトボけて答えた——

「ヒツジ?——ボクはまだ生れたばかりだから、《ヒツジ》などという名まえさえ知らないね。」

争いは激しくなったが、ゼウス大神の調停で、協定が結ばれた。ヘルメスのもっていた堅琴とアポロンのもっていた羊とを交換して、これより以後、羊はヘルメスのもので、堅琴はアポロンの持ち物となった。以来、ヘルメスは牧畜の神となり、アポロンは音楽の神となった。

広々とした牧野に羊を放牧する場合、羊たちが迷い子にならないように、堅琴や牧笛を鳴らして羊の群れを誘導して行った風習は、この神話に見られるように大層古い時代からのものだったことが推察されよう。そして音楽というものも、牧場的風土の中の民族では、この牧場で掻き鳴らし吹き奏でる弦琴や牧笛の音が起源であったのであろう。澄み切った優雅な楽器の音色は、はろばろとした大気の中をわたり、白く輝く「綿毛のような羊の群れ」(ウエルギリウス『アエネーイス』)の上にひろがって、丘や谷にこだまさせたことであろう。古代ギリシヤについて、ローマ人たちも、この牧場に美しさと詩情を感じた。まろやかな上半身を肌白くあらわにした牧場のニンフェ(精)は小羊と戯れている——そんな情景をポンペイの人たちは浮彫りにしたし、ラテン文学の中の最大の叙事詩『アエネーイス』『Aeneis』を綴り上げたウエルギリウス Vergilius (BC 70—19)の墓の碑銘には『我、牧場と田園と将軍とを歌えり』と刻まれている。そして紀元後三世紀にもなると、牧場で

生れ育ってゆく少年と少女の愛と性の目ざめを素朴に且つ情緒豊かに描いた『ダフニスとクロエにまつわる牧人風の物語』(ロンゴス著)などの文学が幾つも世に出るようになった。

\*

牧場が身近かにあり、羊の群れが身近かにあった。その羊のからだから採った毛皮や羊の毛も当然身近かにあった。日常生活の習俗も羊毛や羊皮と密接なかわり合いを持った。ローマ人の結婚式では、花嫁と花婿は、一枚の羊皮を被い掛けたベンチの上に並んで坐って、神に供えた小麦粉の菓子分けて食べるきまりだった。二人の神官によって進行した結婚式の行事が終り二人が花婿の家に到着すると、花婿は家の戸口に羊の油を塗り、門柱には毛織り(ウール)のリボンをかけ、その次に花嫁を両腕で抱え上げたまま敷居の上をまたいで越した。——二人で坐る羊皮といい、戸口に掛けた毛織りの紐といい、すべてこの家庭生活が羊の上に成り立っている、という価値感から生れ出た習俗であろう。

家の中に入り、饗宴がひらかれる。いちばんの御馳走は羊肉である。「正餐会には十二の皿がおかれ……白羊宮の皿には雄羊の肉とエンドウ豆の料理が盛られた」(ペトロニウス『サティリコン』より)。ローマの低所得階級の人たちは、ほとんど肉は食べなかった。羊肉は御馳走だった。

羊を屠った後の骨も日常生活の中に入りこむ。ポンペイの有閑階級の婦人たちは、衣服や化粧に華美をこらし、午後になると、親しい者たちが集って、入浴後ののどかな一時を、羊の骨で作ったお手玉で遊んだり

して暇をつぶしたらしい。そんな絵がナポリ国立博物館に残されている。家畜から採られる乳もローマ人に愛用され、牛や山羊から採った乳から、現在のイタリア人が作っているものと同じような、美味で豊醇なチーズを作って、日常の食用としたようである。

\*

羊から剪り採った毛は、紡ぐため、織るために家庭の中には沢山あった。羊毛の束は籠の中などに入れられて、常に部屋の一隅か中央に置かれていた。羊毛の束はいろいろのものに使われた。

ローマ人の使うベッドは木製か金属性で、スプリングの代りに青銅製の金網を張った。そしてその上に、ワラか羊の毛を詰めた敷布を置いた。羊毛を使う家は贅沢な家であった。羊毛は柔らかくフワツと盛り上っていたから、その一房をつかんで何かに詰める「詰めもの」としても使われたし（タティオス『レウキッペーとクレイトポーン』）、濡れたものを拭いとるティッシュューの代りとしても使われた。——ギリシャ神話の中にそんな使われ方の一節がある。

狩猟の女神であり清純で潔癖な処女神アテーナーは、武器を注文するために鍛冶の神ヘーパイストスの仕事場を訪れた。美の神アプロディテーに捨てられたばかりのヘーパイストスは一目見てアテーナーに恋を感じ、その慕情をアテーナーに打明けたが、潔癖な処女神アテーナーはこの言葉には耳もかさずに逃げ出した。ヘーパイストスは女神のあとを追った。やっと女神に追いつくと、いきなり女神を腕の中に抱きこんだ。女神は逃れようと悶えた。ヘーパイストスは欲望が高まってついに抑え

切れずに処女神アテーナーの白い太腿に精液を放射しもらしてしまった。怒りと嫌悪に堪えず、女神アテーナーは傍らにあった一つかみの羊の毛を手にとって太腿の汚れを拭い去って、その羊毛を大地に投げ捨てた。——ところが、この男神の精液によって大地は懐胎して、大地はエリクトニオスという男の子を生んだ。このエリクトニオスというギリシヤ語には「羊毛と大地」という意味が含まれている、と解釈する俗説も行なわれている。アテーナーはこの男の子を自分の子と考えて、神々には内密でこの子を育てようと考えた、という。

\*

目くるめくような、素朴で強烈なエロティシズムである。羊の毛の滑らかさや柔らかさには、こんな神話が生まれるほどのエロスが含まれているようだ。——後述するが、日本に羊毛が輸入された時、羅紗緬（ラシャメン）という言葉が生まれたが、羅紗、つまり羊毛製毛織物と緬羊との結びつきの言葉が「洋妾」（らしやめん）の代名詞になったのも、そこにエロティックな要素があると考えられたからのものである。

#### 四、中世一、〇〇〇年間の空白

イエス・キリストの生誕を起点とする「紀元」から以後、つまり紀元後に、イスラエルに起ったキリストの教えは、ローマを中心として地中海周辺のヨーロッパ諸地方に拡がっていった。——そして、ここに、長い長い中世の世界がはじまる。それは、一〇〇〇年以上にまたがる深淵である。ひとくちに「一千年」というけれども、それはまことに気の遠

くなるような広がりや深さを持っているものである。「十年ひと昔」という——それだけでもその間の歴史を把握整理するということは大変な仕事である。それが更に一〇〇年間となって、その世界の動きや人々のはたらきを探る、となると、もう並大抵の作業ではなくなる。

中世という、黒い大きな幕に被われたような文化の空白の時代——それが一〇〇〇年以上もつづく、となると、一体どういうことになるのか、途方に暮れる。何故なら、ローマやフランスなどを中心として広がっていった中世の文化はキリスト教の世界に被われてしまつて、すべてがキリスト中心、キリストを通しての神への志向に統合される集合主義的な世界観に捉われ統一されていたために、神の教えと関わり合いのない生活の記録や生活の改善などは殆どなされていなかったからである。

それでも尚、多くの学者や学究たちがこの分野に取り組もうと努力はしたが、結局、資料においても文化としての展開についてもほとんど発見し得ないで終つた。彼等はこの空白の時代の研究の匙を投げてしまつているようである。——少くとも、羊の飼育や羊毛の文化の開発などに関して、この一〇〇〇年にわたる時期には何の変化も進展も見られない、この時期は空白の時代である、と断定している。(註a)

\*

私は先人の研究の空白を埋めようと、尊大にも、改めて、紀元前から中世末に至るまでの記録や文学作品を手当り次第に拾い集めては目を通して読みつづけ探しつづけたのだが、たまたま目につく文字は「絹の衣」などという表現であつて、羊とか羊毛などにかかわり合う表現には全く

といていい程、出遇うことはできなかった。——この取り組みの数年間の成果が空白だったことは、私にいらだたしきを感じさせ、後に、空しさからの自失状態をもたらした。

### 五、羊毛文化の基盤——女の糸紡ぎ

古代ギリシャ人と同じように、古代ローマの人たちは、紀元前五世紀から紀元後数百年にわたる長い間、羊毛を各人の家庭の中で紡ぎつづけていた。それはすべて女性の仕事であつた。殊に、部屋の中に剪り採つた羊の毛の束を大きな籠の中に入れて、そこから紡錘(つむ)を手にして糸に紡ぐという手仕事は、貴族だろうと農家だろうと変りなくこの家庭でも何千年にわたつてつづけられたものだった。「羊毛を紡ぐ」という仕事は女性の義務であり特権でもあつた。少女は母親から羊毛の扱い方を克明に教えられ修練させられた。

十二歳の少女クロエーは冬になると、「鶏が啼くころから、部屋の中で火をどどん燃やしつづけて、紡いだり羊毛を梳いたりしていた」し、それより更に成熟してゆくと「終日、養いの母親がそばに付いていて、羊の毛梳きを教えたり、紡錘(つむ)を旋したりしながら、嫁入り話を持ち出したりした」——紀元三世紀ごろのラテン文学『ダフニスとクロエー』の、牧人生活の活き活きとした生活描写の一齣である。

農民に限らず、貴族や富豪の家庭でも、女性は羊毛を紡いだ。——しかし、富裕に慣れ華美に驕つたローマの貴婦人たちは、オデュッセイア王の妻ペーネロペイアでさえ室内で機織りをつづけたような、ギリシャ

の女性の勤勉さにはあやからずに、自分の部屋には引きこもらず、力仕事を伴う料理や織り物などの家事は奴隷にまかせて、夫とともに食事をし、優雅に着飾って自由に振舞った。ローマの一般市民もそうであった。ローマの主婦の主な仕事は、家庭を管理すること、召使いを管理することであった。それでも、最も女性らしく、最も家庭婦人らしい上品な仕事だけは手離さなかつた。羊毛から糸を紡ぐ仕事は、女性の優雅な特権であった。——たしかに紡錘を手にしてゆっくりのんびりと真白い羊毛の束から細い糸を作り出してゆく作業は、人の心をなごやかにする美しさをもっているものだ。根気もいるけれども、その根気は、家庭の主婦となっている根気と相通じるものがある。それは気高い作業であり既婚女性の生理に適応した快適な仕事でもあった。家庭の人となっていることは、羊毛を紡ぎつづけることと同じことであった。ローマの女性は羊毛を紡ぐことだけは自分で行なった。

ローマの花嫁が結婚式の際、羊の毛皮の上に坐り、羊の毛で織ったリボンの下をくぐりぬけて、羊毛とは密接なかわり合いをもつ家庭生活の中に入って以来、羊毛と花嫁、羊毛文化と花嫁とは、切っても切れないうものになっていったようである。——その後一五〇〇年から二〇〇〇年も経った十四世紀のフランスにあっても、貴族の花嫁でさえ結婚式のミサの時には、その手に紡錘（つむ）をとって、少しの間、糸を紡ぐのが花嫁の「きまり」とされていた、と記録されている。農村では勿論当然のことであつたらう。——「糸を紡ぐ」ということが、家庭の女性としての必要不可欠の条件であつたことを、この結婚式の「しきたり」

は、象徴的に、だから又かえって強烈に、物語っている。

三〇〇〇年以上もつづいた「女性の糸紡ぎ」の作業は、羊毛を西欧全般に普及させた原動力であつた。女性が家庭で糸紡ぎをつづけていたからこそ、羊毛は西欧に広く深く長く行きわたって行つたのである。——エラムの首都スーサ出土の浮彫り『糸を紡ぐ女』の素朴で明確な彫刻がルーブル美術館にある。紀元前一五〇〇年頃の作といわれるこの浮彫りの彫刻を見ると、そのころから日常極く当り前の、どの女性でもやっている「糸紡ぎ」の作業が、三〇〇〇年経った紀元後十四世紀になつても殆ど変らない仕事としてつづいている——そんな悠久な人間の営み、飽きのない長い長い日常の繰返し、その人間の営みの奥深い底力を感じさせられて、胸の奥底から揺さぶられる感動を覚えすにはいられないのである。

\*

家庭の中で紡がれ家庭の中で織り上げられたローマ時代の羊毛の製品は、フェルト状で使われ、布として衣服に使われた。古代ギリシャに倣つて、同じ温暖の地のローマ国内では、素朴に肌着と上衣を布一枚づつで身につけてはいたが、ローマ帝国の範土が広がるとの交流が生じた後は、ローマより寒い西欧諸民族の風習を採り入れて、衣服のスタイルは序々に変わってゆき、一枚の布だけではなくて、布と布をつなぎ合わせた衣服を考案して行つたようである。もちろん、肌着や上衣を何枚も重ねて着ることも盛んになった。ローマの皇帝アウグストゥスは風邪をひき易かつたので、四枚も羊毛製下着(テュニカ)を着込んだ上に、



足のまわりを長い毛織りの布で包んでいた、と記されている。

布と布をつなぎ合わせて、短い袖や長い袖のシャツや上衣や外套や肩掛けとして着用していたことは、残された数多くの絵や彫刻や記述で明らかになっていることだが、それでは一体どうやって布と布をつなぎ、合わせたか、ということになると、当時の衣類の遺品は、数年前に英国内で発掘された遺品以外は、全く発見されていないために、専門家ですら「縫う」という技術が当時あったかなかったか、全く判らない、と途方に暮れている仕末である。(註b)

——文化史的に空白の、そして我々学究にとっても暗澹たる「暗黒の時代」なのである。私は茫然自失の状態におち入ってしまった。

\*  
叢(やぶ)などに引っかかっている羊毛を拾い集める(つまりらぬ)作業のことを、英語では'wool gathering'というが、私のこの仕事も何だかこれに似ているような気がする。英語の「羊毛集め」wool gatheringという言葉には「ほんやり安心してしまう状態」を意味する語義もあるから、私が「とりとめない空想」にかられて、結局、茫然自失してしまったのは、当然のことなのかも知れない。

\*  
家庭の中で紡がれ(home spun)家庭の中で織られた羊毛製品は、品質の仕上りとしては、まだらであり、均一のものではなかったことは当然予測される。「上衣からさざれ毛を取りのぞいたり」しなければならなかったし、又「薄手で汚斑だらけの上衣や厚い下着」などはいつも

数多く見られたにちがいない。(紀元前三世紀テオフラストス『人さまざま』の一節)。——それでも、それを衣として身にまとった姿は輝く美しさを放ったようである。紀元後一世紀ごろに作られたローマの大叙事詩『アエネーイス』の中で、スパルタの乙女は、

膝はあらわにして

なびける衣の摺は

集りて一つの結節となりぬ

と、嘆声を洩らす美しさに描かれている。

\*  
しかし、やはり素朴な家庭製品は、更に見事に仕上げられるために、専門の職人の手にわたって、仕上げを施され、染められ、仕立て上げられることが要請されるようになった。特殊な紫染めを秘伝としていたユダヤ人を中心として、この羊毛の世界に「職人」というものが登場して来ることになるのである。

## 六、貴重なティルスの紫染め

イエス・キリストが十字架につけられて処刑されると決ったとき、ローマ軍の兵士たちはイエスを官邸の中庭に連れてゆき、部隊全員を呼び集めて、イエスに「紫色の衣」を着せかけ、茨の冠を編んで頭にかぶらせて「ユダヤ人の王、安かれ」と嘲弄しながら、その前に跪いたり、葦でイエスの頭を叩いたり、唾を吐きかけたりした。そして今度は紫色の衣を剥ぎとって、もとの衣を着せると、十字架に着けるために処刑場

に向って曳き出して追い立てていった。

\*

イエス・キリストが処刑される直前の情景を、福音書のマタイ伝とマルコ伝とは同じような記述で伝えている。イエス・キリストに「紫色の衣」を着せかけたことは、彼が一国の王となったことの象徴的な表現である。ローマ帝国内では、紫色の衣は王者しか着ないという「きまり」になっていたのである。イエスを十字架につけたローマの兵士も隊長もまたイスラエルの人たちも、身につけている服は染色していない粗い羊毛の毛織物が大部分だったようである。

本国のローマの市民たちの正装も、この染色されていない羊毛の織物のトীগ ( toga ) だった。一般市民と区別するために、貴族たちは「紫」という高価な染料を使って、衣の縁 ( へり ) に筋を入れて、階級差別を打ち出した。元老院の人たちは、太い紫色の筋の入ったものを着、騎士たちは、やや細目の紫色の筋の入ったものを着た。このトীগは一般市民のものと区別されて、トীগ・プラエテクスタと呼ばれた。——紫色の染料が稀少で高価だったことから、紫色の染色は、高貴の人の地位象徴 ( ステイタス・シンボル ) となっていた。例えば、ユリウス・カエサル ( ジュリアス・シーザー ) は公職のしるしとして紫のトীগをまとった。その後、高官の多くがシーザーの真似をして紫衣を着るようになったことがあるが、これは間もなく禁止されて、紫の上衣 ( トীগ ) は皇帝だけのものとなった。紫色は王者のしるしであった。

\*

その王者のしるしとして、兵卒どもがイエスに着せかけた「紫色の衣」 'the purple' は、マタイ伝福音書では「緋色の上衣」 'a scarlet robe' と訳されている ( 二七章 28 節 ) 。マルコ伝一五章 17、20 節に記された「紫色の衣」 'the purple' とは食いちがっているように見える——がしかし、実は、どちらの記述も正しいのである。紫色と緋色と翻訳はちがっていても、もとの染色の色彩は「ティルス染めの紫」 Tyrian purple のことであり、見た目には、紫色とも紅緋色ともとれる輝やかしい色合いだったからである。

\*

地中海の浅いところで採れる巻貝の一種に、紫色の色素を含んでいるものがあつた。そのパール腺から分泌される色素は、羊毛の染料として見事な美しさを定着させた。古代フェニキヤ南部の首都テュロス Tyros, Tyrus がこの紫の染料を一手に扱う輸出港だった。ところが、この巻貝には紫の色素が極く微量にしか含んでおらず、その上色素を採集するのには大変な苦労があつたため、この紫色素「貝紫」かいせしき は極めて貴重なものとされてきた。紀元前一〇〇〇年ごろから、この輸出港の名に因んで、この紫色染料や染物は「Tyros の紫」 // テュロス ( またはテリス ) の紫<sup>1</sup> と呼ばれて大変な高値を呼んだ。「テュロスの紫」の発見と使用と販売とによって、このテュロスの都やシドンの都は大いに繁栄した。

この「テュロスの紫」には暗い紫色もあり明るい紫色もあつた。「紫」と概称してはいるが、染め上った色合いは、濃紅色 ( クリムソン ) のよ

うなものだといわれ、鮮紅色にわずかに藍色を含んだ色合いであるから、scarlet スカーレット(輝く濃紅色)にも、明るい purple(紫色)にも見えたのである。

そして一〇〇〇年後のローマ帝政時代後も、この紫の染色はテュロス人の独占であって、ローマでは何とかしてこの色の染料を作ろうという試みが幾度かなされたが、いずれも成功しなかった。テュロス人の秘伝であった。——そのため、紀元後数世紀に至るまで、ローマ人たちは染色することをあきらめた。そのため、染色の技術開発はほとんど行われなかったのである。紀元一世紀のころ、ローマ人はテュロス人の二重染めの羊毛一ポンドに対して一〇〇〇デナリス(一デナリは約一二〇円位)もの高額を支払うことも屢々だった、と記録に残っている。——しかし、残念なことには、秘伝だったこともあって、テュロス紫の染色法は一体どういふものであったのか、未だに解明されていないのである。

\*

ローマ人は布地や衣服に関してはほとんど装飾などの手を加えていない——。それは無関心だったからだ、という歴史学者もいるが、私はそうは思わない。羊毛を主体にした衣服の布地は、漂白も染色も、共にその技術はほとんど開発されていなかったから、止むを得ず無装飾に放置していた、というに過ぎない。ローマの市民たちは、共和制の末期ごろまでは、白やクリーム色の羊毛毛織の服を主体としていたし、貴族はその中で黄味を帯びた上質の羊毛毛織地を用い、一般庶民は薄褐色や黒味が

かった粗末な羊毛毛織地を身にまとった。——カラフルなものを身につけようにも、染色は皇帝専用の紫しかなかったし、その他の色は羊毛には染める方法が発見されていなかったため、華やかに身を飾るにしてもどうにも色美しくは飾りようがなかったのである。

\*

しかし、感覚的で享楽的な日常生活を送っていたローマ人は、やがて服色への強い関心を持ち出すようになる。だが、染色という工程は、テュロス人をはじめとして、当時のローマ人が報告したように「臭気鼻をつく染色の工場が軒を並べている町」の一角に腰を据える染色専門職の人たちに委せ切<sup>まか</sup>って、そこから仕入れる商人たちの手から染色されたものを高く買いとることだけに自足していたようである。職人というものが生れ、独特の地位を獲得してゆき、職人の組合組織が生れてくる、という素地が、こうした社会的風潮の中に育成されていたのであった。

### 七、染色の起源

紀元後二、三百年間、ローマ人の大半は羊毛の毛織物を漂白もせず染色もせず刺繍もせずにそのまま衣服として身にまとっていたようである。従って、ローマよりも遙かに文化がおくれていたと考えられる北方ゲルマニアの諸民族の人々がもっと粗末な衣を着けていたことは当然のことであろう。

紀元一世紀、ローマの史家タキトゥス Tacitus の『ゲルマニア』“Germania”によれば、彼等すべての衣服としては、粗い毛織のもの

を軽く肩にはおってそれを胸の上部で結ぶ短い上衣 *stola* だけであつて、これを縮金か棘かで留めるだけで、身体のほかの部分は裸のままの姿で一日を過ごしたという。わずかに、極めて富裕な貴族と長老だけがびっちり身につけて関節の一つひとつがはつきりあらわれている下着 *Vestis* で上体を包み下肢を被っていた。そして、女たちは羊毛のものを身につけず、ほとんどが麻の布きれを身にまとっただけだった、と報告されている(『ゲルマーニヤ』第十七章「服装」の項)。——しかし、女性の着る麻衣に限って、これを茜色で染め分けていたらしい。女性の「女らしさ」の表われである。

羊毛の毛織物を主体とした紀元前後数百年間というものは、羊毛の漂白や染色の方法はほとんど知られていなかったであろう。羊毛という材質は、植物性のセインとちがってタンパク質のセインであり、天然の花や樹液にすぐ染まってしまう植物性セインのようには簡単に色が着かず、また同じタンパク質でも比較的酸性が強い絹とちがって、かなり塩基性が強いものであるから、絹の染色よりも羊毛の染色は困難なものだったと考えられる。ゲルマーニヤの女たちが茜色で染めつけた麻の布を半裸に近いかたちで身にまといながらいたときでも、貴族たちの羊毛の衣には染色は何ひとつ施されていなかったのである。

では、糸や布に色を染める、という技術は、一体いつのころに発明されたのであろうか?——おそらく人類の歴史のかなり古い時期であった

ろう、という推測以外には、考古学者も歴史学者も、はつきりしたデータを打ち出してはいない。染色——これもまた、紡ぐ、織る、という生活のちえと同様に、文化史上の謎になっているのである。

恐らく、「人類」が文化をもつ「人間」となって布を身にまとったとき、偶然その布が天然の植物や鉱物の粉末によって色に「染まった」という現象を発見し、天然の植物や鉱物に布を染める力のあることを知って、その力で自分たちの布を自分の思う色に染めることを努力したことから、染色という技術が生まれてきたのであろう。——これは私の推理である。

古代人の染色の物質や方法を知ることが困難である。そして染色を知る手がかりとなる遺物もほとんど発見されていない。——わずかにエジプト、ツタンカーメン王(B.B. 1360—1350年)の墳墓で発見された布の断片が、その手がかりとなる位である。その布を仔細にしらべると、その布はゴブラン織の方式で織られており、その布の色は、布の素材それ自身の色のほかに、*madder*(茜の一種)から採った染料で染められているものが見出された。種々の資料から類推して、紀元前二〇〇〇年かあるいはそれ以前のころから、エジプトでは染色というものがある程度行なわれていたらしい、と学界では言われている。

更に、その他の墳墓から発見された布の断片を調べて見ると、新王朝時代のエジプト人は、植物の *indigo*(インディゴ)・*henna*(エジプト産で芳香ある白い花が咲く) *safflower rose*(ベにはな)などを使って麻

の布を染めていたことが判る(註c)

\* エジプト墳墓で発見された染色の遺物は麻の布であった——残念ながら羊毛の遺物はない。紀元前二〇〇〇年ごろのメソポタミアでは、やはり植物の実みそれ自身の「nutgall」(五倍子) pomegranate (ぎくろの実) sumack (ぬるで) などのタンニン酸を色留めに使つて、植物の花などの色を色美しく布に染めていた、と類推されている。(註d)。

——しかし、これも羊毛の布ではない。羊毛の布は、植物の色素には容易になじまなかつたのである。——だから、他の分野では文化が極めて高度に発展したローマ帝国時代になつても、羊毛の布だけは、染色されずに、ほとんど生地のまま衣服として着用されていたのである。しかし麻や絹を色鮮やかに染め上げることは、これより二千年も前から知られていたことだから、羊毛も染めようという試みはなされたにちがいない。

\* 熱湯を通して洗浄しただけの羊毛の色合いは、まだ天然のままの羊毛に近く、飴色のような色を呈していた。一般の人は、その色合ひのまま、これを服として身につけた。しかし高貴な人たちは、一般市民たちから区別するために、白く胡粉を塗ったり、晒あらしたりした羊毛を身につけた手間がかかって高価なものだったようである。羊毛の漂白がいつごろ考案され出したか、資料は無い。しかし室内で硫黄を燃やして亜硫酸ガスを発生させると、ガスと水分の作用で羊毛や絹は漂白されるもの

だから、おそらく、天然に噴出する硫黄の煙にあたつたら、羊毛の色が白くなった……という偶然の経験があり、それを幾度か繰り返すうちに、硫黄煙の漂白力を知つて、やがて、この「硫黄蒸し」の漂白技術を開発していった、と想像される。この「硫黄蒸し」の工程が、つい今から六〇年位前までずうっと羊毛の漂白のために使われていた、と知つて、長い長い人間の生活の知恵の素朴さに、私は更あらためて驚かされる。

\* 漂白とは、着色している物質を無色にすることであり、色素またはセインに含まれている不純物を無色にして純白にする工程である。麻や木綿などの植物セインの場合には、布を清流の水で洗い、川原にひろげて日光にあてておくだけで、数カ月も経つと不思議なことに真白になるものである。その化学的变化はまだ理論的には判明していないようだが、二〇〇年位前、塩素ガスが発明され、のちに晒さらし粉が普及するまでは、この原始的な漂白法が行なわれていたのだから、これ又、長い長い人間のちえの素朴さである。

しかし、羊毛は天日てんびにさらしても白くならなかつた。軽ろやかで暖かく柔らかで丈夫な羊毛の生活には、植物性の布とはちがった隘路がいりがあつた。——漂白の次が染色であり、染色のために不可欠の媒染剤の問題が未発見のまま残されていた。

#### 八、中世の染めの色(赤・青・黄)

紀元前数百年頃から紀元後四世紀か五世紀ごろまで、ローマの文化圏

内の人びとは、紫の色のほか、ほとんど染色を知らなかった、と推定される。残された詩や文学や戦記や記録を調べて見ても、衣服の「色」に関する記述を見出すことは極めて困難である。

\*  
トロイヤの英雄アエネーアースが幾多の艱難を経験した後、ついにイタリアに到着してローマ建設の礎を築くに至るまでを謳い上げた大叙事詩『アエネーイス』“Aeneis”には、珍らしくいくつかの色彩描写がちりばめられていて、この英雄叙事詩を華麗なものに仕立て上げている。しかし、キリスト生誕直前（作者ウエルギリウスはBC16年に死去）に綴られたこの詩の中でも、そこに縷められた色どりは「紫」かサフラン色だけである。

\*  
可憐なカルタゴの美少女は「紫の長い沓紐」を結ぶ。  
宮殿内は王公の豪華を展げ、床台を覆うのは美事に刺繡した高貴の紫の布である。

カルタゴ人らは、英雄アエネーアースが身につけた紅藍花色でアカントゥス模様刺繡した外套を見ておどろく（以上第一巻）

\*  
紫は「高貴の紫」と形容された。それは高貴な神アエネーアースだけが身につける色であった。アエネーアースの肩から垂れる外套は「テュロスの紫」の光で輝いていて、これは富めるデイドーの作った贈り物だ、と附記されている。高貴な紫は黄金の糸を経に織り交せて更に高貴さ

を強調する。アエネーアースの高貴さに対抗できるのは、女王の紫の衣だけである。その紫の衣は黄金の縮金で束ねられていた。（『アエネーイス』第四巻）。——アエネーアースの紫の外套は、第三巻では「緋の外套」とも形容されている。——イエス・キリスト処刑に先立つ五〇年ほど前のこの大叙事詩でも、「テュロスの紫」で染められた布は、サフラン色といわれ、緋色と形容された。前述したキリストの紫の衣と同じ表現法である。

\*  
そして、紅緋色ともサフラン色ともとれるティリアン・パーブルの色彩表現のほかには、布の染色に関する記述は「雪白の天幕」などという言葉以外は、発見できない。

\*  
紀元後三世紀後半の作といわれている牧人風の物語『ダフニスとクロエー』には、やはり染色の記述は全くないが、わずかに、少年ダフニス

が捨て児として発見された時の描写に、  
「男の赤ん坊に着せてあった小羽織は美しい紫染めのものだったし、それに金の留めがねまで添えてあった」

という一節が見出される。紫染めは紅染めとも訳されているが、既述した「紫いがい」の液汁からとった染料で染めた貴重なもの、つまり「テュロスの紫」のことなのである。（そしてこの色の染色法は未だに解明されていない。）

紀元後三九五年、テオドシウス一世が死去して、ローマ帝国は東西に二分し、ローマの時代は終る。そして、キリスト教を基盤とした長い中世の世界が始まる。戦乱がつづき、忍従の庶民生活が広がる。領主や地方豪族は、野蛮さから序々に貴族的な優雅さを身につけはじめる。紀元後一〇〇〇年のころには騎士階級はヨーロッパ全土に定着して、雄渾で華麗なよそおいを以て登場する。

\*

紀元後七七八年シャルル大帝がスペイン遠征をした際、後衛軍がピレネー西方の国境で地方住民バスク人の襲撃を受けて殆ど全滅した事件を英雄騎士ロランの武勲を中心に雄渾素朴に謳い上げた叙事詩に『ロランの歌』という名作がある。紀元一〇〇〇年から一一五八年の間に制作された、といわれている中世フランス叙事詩の代表的な傑作であり、フランス文学史上でも最古のものの一つなのであるが、ここでは、勇壮果敢な騎士たちは、白絹の underwear をつけ、肩より貂の皮衣を羽織って、アレクサンドリア渡来の白絹地を誇って、戦場を駆け廻り、一騎打ちの激しい勝負をしている。羊毛の布や衣の記述は、残念ながら見当らない。

しかし、何度読みかえしても、いつも心に焼きつく華やかな色彩感が全篇にあふれているのが感じとれるのは、何故なのであるか？——それは合戦のために兵卒たちが掲げる吹流しの旗の色の描写のためだ、と判った。

「異教徒勢の吹流しは、白も青も赤もあり」（999行）、騎士ロランはその青色の旗じるしをことごとく胸中に突き込んで相手を打倒した」（1620

行）。そのロランの窮地を救うために赴く皇帝のフランス勢は「吹流し、白く、また赤く、また青なり」（1800行）と鮮やかに描かれているのだ。

澄みわたった蒼空にはためく白と赤と青の吹流しの旗は、素朴な色合いであるだけに、目眩くような力強い感動を伝えたことであろう——白と赤と青。この三つの色の美しさ……しかしながら、中世の文学にはこの三つの色しか記されていないのである。十三世紀初頭に書かれたといわれている大叙事詩『ニーベルングンの歌』“*Nibelungen Lied*”になると、もうどこにも染色の色彩描写は見出せない。

中世八〇〇年間の布地の染色は、赤と青が主体であった。そして化学工業と称し得る布地の染色が、薬品においても染料においても、この長い中世の期間中、何ひとつ新しい発見はなく、依然として古代のままの生産方法がつづいた、という点で、やはり、羊毛の文化にとって中世は空、白、または暗黒の時代だった、と言って差支えなからう。——わずかに青と赤と黄と、稀れに黒とが染色の色であった、ということが、残された僅かの資料から推定できるだけである。

### 九、中世の染色秘法

先ずはじめに色あざやかな天然の鉱物があり、美しい色の花があった。人間は天然の鉱物や植物から絵の具（顔料）を作った。そしてこの顔料で、王宮や墳墓を彩色した。

\*

古代エジプト人は天然の鉱物を砕いて細かい粉末とし、これを絵の具

とした。墳墓の遺跡を見ると、さまざまな色が使われていたことが判る。黄土 (ochers) とか銅酸化物 (孔雀石、珪孔雀石) とか雄黄 (又は石黄) (砒素の天然硫化物) とか藍銅鉱 (炭酸銅・青) とか炭や煤などが、黄色や赤や黒の顔料として使われていたが、中でも孔雀石やラピス・ラズリのような貴石 (銅の酸化物) を燃やして石灰の炭酸塩などと一緒にガラス質になるまで加熱して得られた「エジプトの青」は、古代初期より有名であった。

古代のメソポタミアでも、赤は鉄の酸化物より、青は銅の硫酸銅より、黄はアンチモン酸塩より、白は酸化錫より作られ、目のさめるような鮮やかな青は、エジプトと同じく、貴石ラピス・ラズリの板から作られ、Khorshad の宮殿を飾り補修するために使われたのである。

はじめに顔料 (えのぐ) があった。その顔料のほとんどは染料とはならなかった。何千年の空しい年月の間、多くの人々が布を染めようと取り組み、虚しく失敗した。しかし、エジプトやメソポタミアで使っていた貴石ラピス・ラズリを輸入して、中世のヨーロッパでは、このラピス・ラズリの硬玉から「青」の染色を得る古代人の知恵を身につけた。

### 青

天然産のラピス・ラズリという石は、炭酸ナトリウムのアルミノ珪酸塩と硫化ナトリウムとの混合なのである。これから染料を取り出す方法はメソポタミアなどの東方で開発されたままを踏襲した。鉱石を燃焼する。次に酢の中に浸して冷やし粉砕する。樹脂や蠟や亜

麻の実の油などで作ったマスチック (ワニスの原料に用いる樹脂のこと) とこの粉末とを交せて、温水の流れの中でこねる。このときのうわずみの乳液が最上質の「ウルトラマリン・ブルー」という染色を作り出すもの (乳剤) なのである。——これは、しかし、秘法であった。ヨーロッパには十五世紀に入るまで全く知らされていない製造の秘法であった。だから布の染色にも稀れにしか使われなかったようである。紫の染色と同様である。

しかし染めの色としての青は欲しい。ラピス・ラズリの貴重さの代りに、何か青の染料が必要とされる。植物に woad (たいせい) という木があつて、この植物の葉には indoxyl の glucosides (配当体) を含んでいるので、この葉から indigo (靑藍) が取り出せた。靑藍色の染色をしようと、フランスやドイツを中心にヨーロッパの広域にわたって、この woad (たいせい) という植物が栽培され、この植物から染料の indigo や indigotin (藍、インド藍) を抽出して、中世の染料として広く用いられるようになった。

この染料は二つの連続化学変化で得られるものである——即ち加水分解をすると glucose (ぶどう糖) から indoxyl を分離し、つづいて酸化が行なわれると、この indoxyle は indigo に変化するのである。現存する数種の文書記録に暗示されている工程を推測すると、次のようになる。はじめ、woad (たいせい) の葉を石の礪臼で押し潰し、糊状になった葉を重い平底のコップ (タンブラー) の中に入れて、そのまま放置し乾燥させる。——化学作用は既にはじまっている。酵素がはたらいて



生の染料を完全に分離させてしまうのである。染料は出来た。柔かい生  
のままか、醗酵したものか、この染料は売りに出される。

次は染色の段階である。染料を購入する。このかたまりを完全に乾燥  
させる。そして粉碎して、染料の粉末を篩ふるいにかける。これですべての準  
備は終る。

いよいよ布を染める段階である。中世初期には、直接火の上にかけた  
大釜の湯の中に染料の粉末を投入して染料を溶かし、その同じ大釜の中  
に布を浸して染色が行なわれた。その際、予じめ別の釜で熱した湯の中  
に Brain (もみがら、ふすま) を入れて、やわらかくした湯を使用する  
のである。特別な染料用剤 (灰など) は加えずに、この染液槽の上に  
蓋をする。醗酵作用は完全に終る。そして更に数時間を待つて、蓋は開  
けられ布は取り出される。鮮かな藍の染色が完成した。この染色は、こ  
の染液槽が完全に熱せられている間だけに成功する。早まったり、熱が  
さめたりして取り出したものが不成功だったことが幾百遍あったことだ  
ろう。気の遠くなるような何百何千年の間の試行錯誤の体験を重ねた後  
に、この染色法ははじめて完成されたのである。

\*

赤の色と黄の色の染色は、布地から不純物やグリースを除去する「色  
どめ」という準備作業を終えて後に、はじめて出来るものであり、この  
「色どめ」は大きな釜の中の沸騰する熱湯の中で行なわれた。セニイは  
染料と化学反応して通称「lac」(ラック)といわれる塗料(ラック)を作り出す  
binding agent (結合剤) ですから被膜されなければならなかった。こ

の色留めのために広く一般に使われたのが、明礬である。酒石 (Tartar)  
も色留めに使われたが、十四世紀になるまでは使用を禁止されていた。  
(Danai という地では一二五〇年まで使用されていた)。——何故なの  
か、その理由はよく判らない。——どなたか御存知ならば、是非お教え  
いただきたい。

\*

### 赤

天然の植物に茜あかね(又は茜根)というのがある。その茜の一種 madder  
(茜の根) から赤の染料は抽出された。古い古い人間のちえの伝  
承である。赤の色はこの茜系統一つ、と行っていい程の世界的な染色の  
ちえであった。——それなのに、一二〇四年モンペリエ地方の染色業者  
たちは kermes という「えんじ虫の雄」だけを「えんじ色」の染料と  
して使用した、と記録に残っている。植物が世界的な赤系の染色の素材  
だったのに、一体だれがこの動物を染料として使いはじめたのか、その  
起源は全く不明である。

赤の色にも種々の段階がある。——地上の植物が色とりどりの染色の  
素材となった。Brazil wood (ブラジル蘇黄) からは「ローズ」や「ピ  
ンク」archil からは「レッド」や「ヴァイオレット」の染色が得られ  
た。赤色に染められた布地は、酸かアルカリの液槽の中に入れられて、  
色をつやや明るさを定着させた。

\*

### 黄

黄の染色は yellow-weed という植物から作られた。色どめした  
あと、この yellow-weed を煎じ出した液を沸騰させた中に布地を

浸せば、黄色く染め上げられた。

淡黄褐色の場合には、色どめは必要ではなく、「くるみ」か「はんの木」(alder)の樹皮と根とを煎じ出した液が使われた。

**黒** 黒の染色は、鉄の酸化物や没食子性の酸やタンニン酸(皮渋など)で作りに出された。そして「五倍子」(ふし)は十三世紀までは使われたようだが、それ以後は禁止されてしまった。——何故なのであろう？

中間色やその他の色は、当然、原色を適当に二色重ねることで作り出された。黒でも、赤と word blue とを連続的に染めて行けば得られるし、黄色を染め出そうとして失敗したのを直そうとすると、偶然に「緑」という染色になってしまうことが多かった。

染色には特別な熟練と秘術を要した。この秘術を体得した者には高い名声が与えられた。王侯貴族や富裕階級の人たちは競ってこの名工たちを独占しようとひそかに激しく競った。名工の染色秘法は、かくして遂に一般に知られる技術や知識とはならなかった。一部の染色のプロフェッショナル(専門職)が誕生したのである。

#### 十、染色職人のギルド(組合) 結成

中世末期まで、地中海周辺の国々には、羊毛染色の技術は秘伝であった。羊毛を「染める」人々は、その秘伝に基づいて社会的な場を占め

てくるようになった。染めの専門の人間として自立できるように評価されはじめた。プロフェッショナルの職人がここに誕生する。

職人たちは一つの地区に集まり、そこで技術の生産に従事した。その「染め」のためには、近くに布を仕上げる織師たちが集っていた方がお互いに好都合である。更に、染め上った布を裁断したり縫い上げたりする職人たちが近くに居た方がやはり好都合である。羊毛を布と衣服に仕上げる各種の職人たちが、この地区に住みついて、その地区は他の牧農の地域とちがった充実感を見せ始める。

他国からの商人たちが、この貴重な染織の「芸術品」を買い求めに、この地区に集り来たった。商人たちは、職人の仕上げた芸術品を買い求めるために、その地区の中に、取引場所としての市場(パサール、バザール)を作った。——つまり、職人が集っている地区には工場と住いどが密集し商人との取引所も出来て賑いを呈した。この地区が都市というものになったのである。城下町とは異なった、近代都市のはじまりである。……誇張して言えば、羊毛の加工の仕事が「近代都市」を形成したのだ、と言えるかも知れない。

特にエジプトやギリシャの新しい都市に集まっていたユダヤ人たちはその染色や刺繍の技術を誇り、彼等の生産する布地はその優秀さで世界にその名をとどろかせていた。イエス・キリストを十字架の上に磔刑に処してしまったユダヤ人たちは、それ以来、自分たちの国土を失って全世界の各地に散らばり、二千年経った現在でも未だに自分たちの国土(ふるさと)を持たない。彼等のことを中世以来、「さまよえるユダヤ人」

Wandering Jew と人々は呼んだ。その代り、このユダヤ人たちは、他国の諸都市において、その秘伝の技術を駆使して、世界の富の大半を占有するほど莫大な富を蓄積して行くようになる。イエス・キリストにテュロスの紫の布を着せかけたユダヤ人の、民族としての不思議な因縁なのであろうか？

とにかく、中世末期まで、このユダヤ人の染色の技術は、神話に近いほど貴いものだったようである。たとえば、十三世紀になってからでさえフリードリッヒ二世は、シチリアに自国の織物工場を経営しようとして、はるばる遠隔の地からユダヤ人の職人たちを招聘しているのである。

\*

中世末期近くまで、ヨーロッパの社会では、社会階級としては、農、祈、戦の三つの階層しかなかった——農とは牧畜農業のことであり、祈とは宗教専従者のこと、戦は戦士、つまり兵士や騎士たちのことである。そして羊毛は、ギリシャ時代以来依然として牧農の一般家庭の中で延々と変ることなく集められ紡がれていたが、それを大量に集め布地に仕上げ染色し調整して美しく仕立てるのは、この三つの階層からはみ出した域外者 out-law (アウトロー) の職人と商人とであった。この新しい階層者が都市を作り富を集めていったことは、先見の明もっていた利発者だ、ということも出来るであろう。

三階層からの外れ者であった職人の中でも、染織の職人は早くから「職人」としての社会的評価を得て、新しい位置(地位ではない)を占めはじめていたようである。たとえば、紀元後七九年の八月二十四日

の昼すぎにヴェスヴィオ火山の噴火の灰に埋もれてしまったポンペイの遺跡の中の二階建ての女郎屋の小部屋には、次のような落書きが残されている。

織物師スケスウスは

奴隷女イリスに惚れてるよ。

女は奴のことなど気にもしてないのに

奴さんは女の情にすがってるぜ。

恋仇 記之。アバヨ！

\*

この落書きに対して、当の織物師スケスウスが、また落書きで反論を書き加えているのは面白い。

お前はジェラシイで狂ってるナ。

美男子で女 殺で優男の俺と張り合うのは、

バカだよ！

「織物師」という呼称があり、その織物師はどうやら身入りもよく羽振りもよかつたらしいことが、この落書きの一駒からでも推測できる。

資料によると、少くとも織物に関する職人だけは紀元前六世紀ごろから早くも専門職としてこの業務に専従して技能を揮っていたようである。——ローマでは、織物業は、布地製作や仕上げや染色の点で家内手工業の段階をはるかに超えていたため、家庭内の娘や妻や奴隷たちの紡

績能力では追いつけなくなってしまった。そこで、自由民や不自由民の「織工たち」は小さな工場に集めて入れられ、そこで次々と優秀な製品を生産しつづけた。それらは各地の市場に送られ、また外地への輸出にも精彩を放ったのである。

上質な毛織物が生産されて市場に出廻ってくると、富裕な階級の人々は、こういう織物で身辺を飾って美しさを競い合いたくなる。入手するためには高い代償でも支払うことをいとわなくなる。——その需要の強い欲求を充たすのが、商人たちなのであった。

\*

紀元直後（AD14—AD96）のローマ黄金時代には、ローマの上流階級では、同じ家庭内で紡ぎそして織り上げた羊毛製品であっても、彼等はそれを職人に渡した。——職人は「けば」を立てたり、汚れを洗浄したり、白く漂白したり、見事なデザインに裁断したりした。——こうして仕上げられた「もの」（製品）を職人から受けとった人々は、これを「おしゃれの服」として身につけたのである。これが更に精巧な毛織物になると、たった一人の職人の手仕事では手に負えなくなり、各専門職の人たちが揃っている染織の工場で織られ染められ仕立て上げられた。——流れ作業の総合的な工程のはじまりである。

\*

そんな羊毛や布地などを集めたり職人に渡して加工仕上げをさせたり仕上げ品を購買層に売り渡ししたりする役目が商人、という新階層の人た

ちである。——商人たちは競って職人たちの生産をあたり、商人の仲介による精巧な毛織物の供給は更に上流階級の欲求を刺戟し需要をあおった。需要は供給をせき立てる。——そこで職人たちは、秘伝を守りながら尚且つ自分たちの「職人」という立場も守り、技術を保存すると同時に自分たちの利益も守り高めようと、彼等は仲間同士で寄り集る。同業組合が作られる。しかも職人という階層は、生産品に対してあれほどの芸術的な評価が与えられていても、それでも未だ人間としては社会的にはアウトロウ（埒外者）として下賤な階層と見做されていたのだ。社会的な地位と評価とを得るためにも団結は必要であった。

紀元後一〇世紀前後に、まず羊毛製品関係の職人たちが他の業種に先がけて組合（ギルド）らしきものを結成したようである。九世紀ごろから、北フランスやゲルマン地方の農民全般にわたって、氏族団体を守りつづける団体として「ギルド」Guild (Gild) という名称が使われていたが、十一世紀ごろから中世ヨーロッパ全域で、職人や商人たちの同業の仲間の集りを「ギルド」Guild と称するようになった。そのギルドの中でも、羊毛の染色や織物に関わる職人たちの「ギルド」が他の業種に先駆けて早や早やと結成されたようである。——羊毛工業組合のはりである。組合は技術と利益を守るのが目的であった。世界共通語の「ギルド」は、元来はアングロ・サクソン語の gold 又は yeald が語源だと考えられている。gold——つまり「オカネ」が語源だとは、本音について痛快である。

- (註 a)
- (註 b) } Maurice Daumas : “Histoire Generale les Techniques”  
(1962, Paris)
- (註 c)
- (註 d) } Georges Goyan : “Egipian Antiquity” 等々

(筆者は本学講師・美術担当)